

KG263

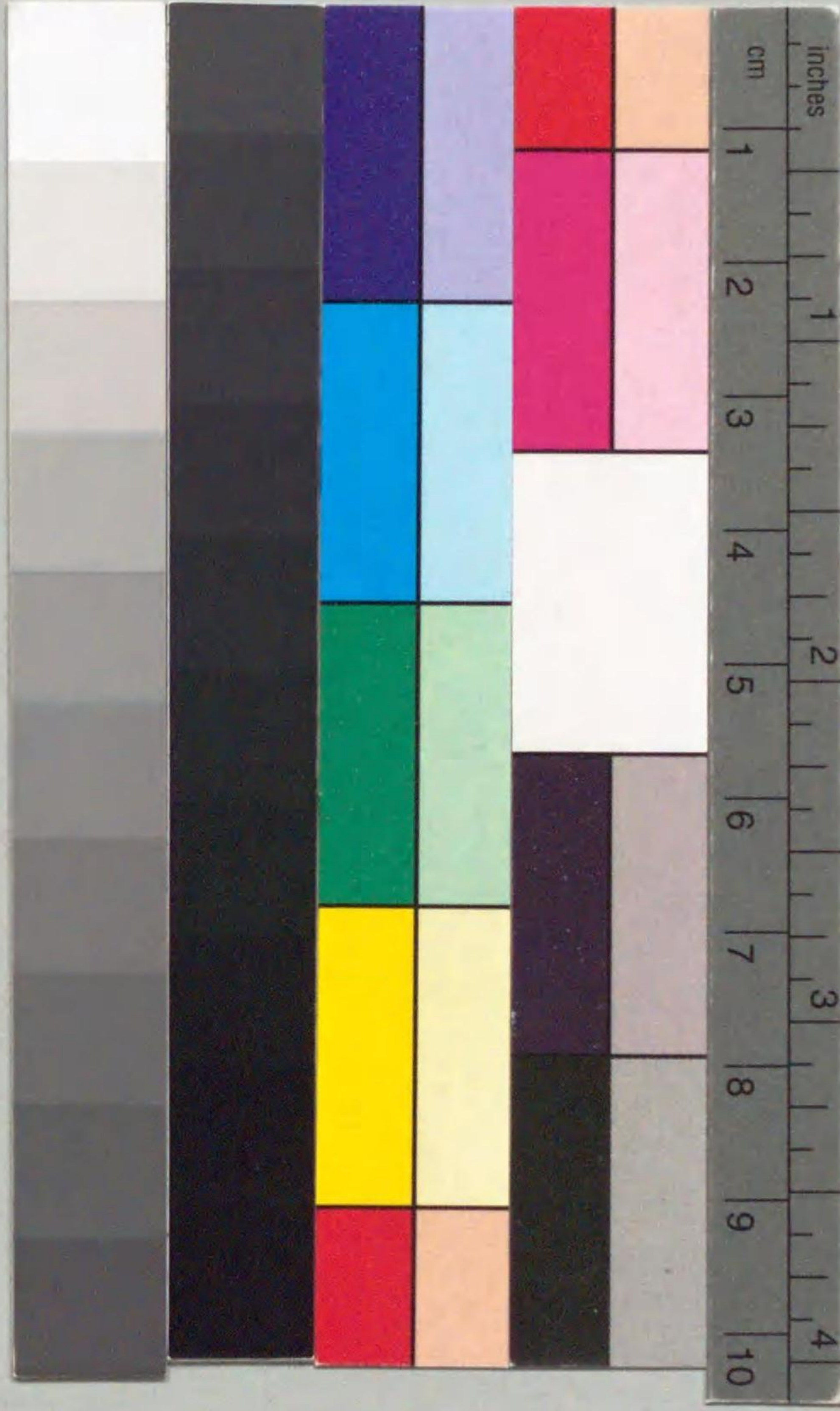
1

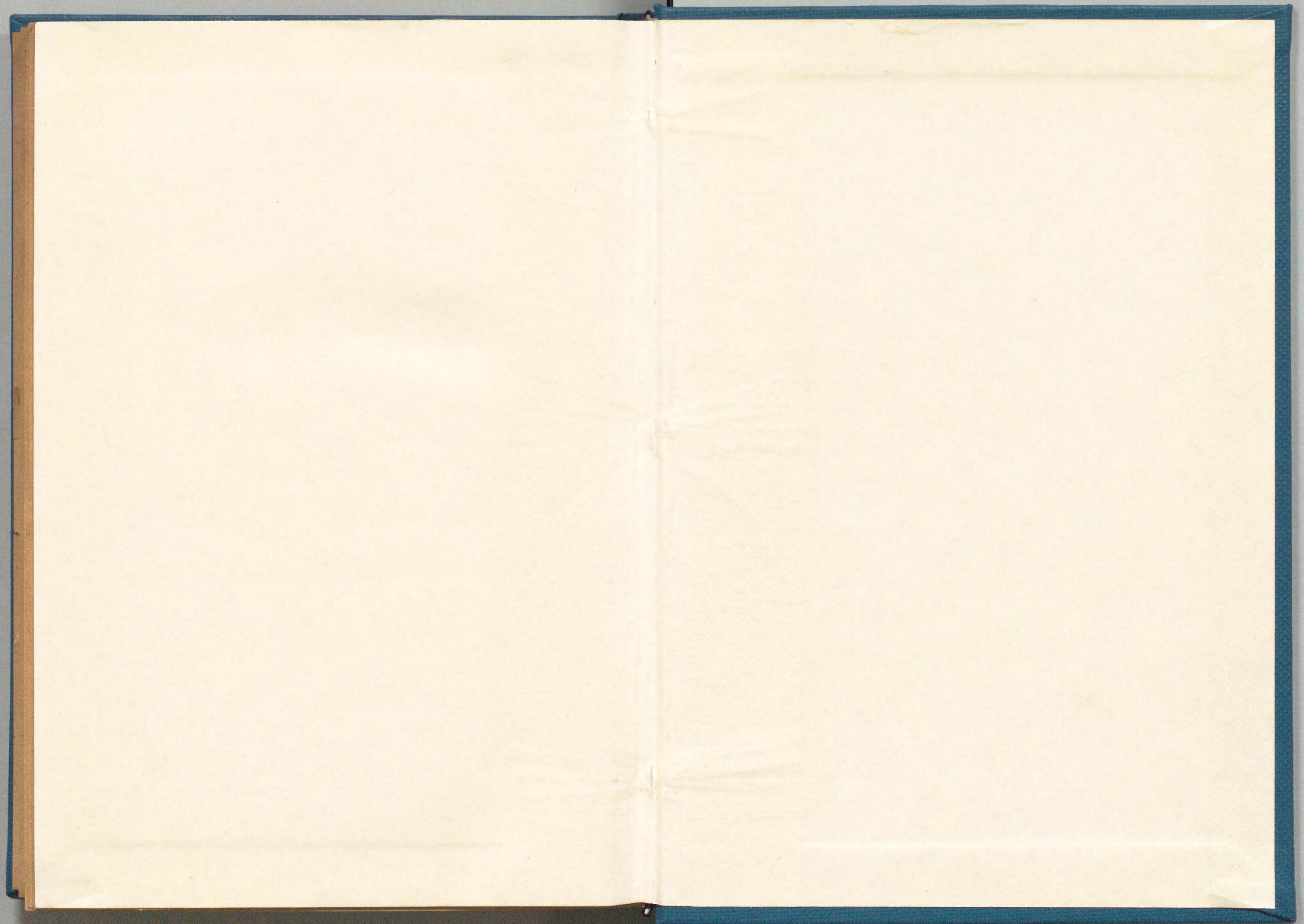


00795393



複写





K18J-21

穎原退藏編

校註
俳諧七部集

東京
株式會社
明治書院



KG 26J
1



795393

例言

一、本書は俳諧七部集に選定された各集を、それ／＼當初單行された原版本によつて翻刻したもので、一般に七部集の研究に資すると共に、又高等程度の諸學校の教科用としても編纂に意を用いた。

一、翻刻は成るべく原本の面目を忠實に傳へることに努め、誤字・宛字・假名遣の誤等も改める所がない。たゞ假名遣の誤や甚しい誤字・宛字等には、右傍に小さく括弧を附して正字を記しておいた。又通讀に便する爲、送假名の不足を振假名として補ひ、難讀の漢字にも便宜假名を附けたが、それは原本にもとから附けてある片假名の振假名と區別して、すべて平假名を用いた。なほ濁點も便宜上濁る事が明かなものにはこれを加へ、原本にすでに濁點を附してあるものは、右傍に（マ、）と記してこれを分つた。句讀は原本には全くないが、文章や詞書の長いもの等には便宜附することにした。その他少しでも私意を加へた箇所は、一々これを頭註にことわつた。

例

言

一

一、頭註は紙面の都合上多く簡略に従つたが、古來の重要な註釋書は大概涉獵して、その參考すべき説はこれを探ることに努め、また編者の見る所をもまゝ記した。難解の語句についてはほゞ註を加へたが、一句全體の解釋、附合の味などに至つては、もとより限られた紙面のよく盡すべきではない。なほ頭註の不備誤謬については今後の是正を期したい。

一、參考として卷末に俳諧七部集の成立に關する小考を附し、各集の簡單な解説、竝に主要な註釋書をあげておいた。

一、要するに本書は俳諧七部集の本文として、最も信憑すべき定本たる事を専ら期し、なほ研究・教授の便に資する爲、その註釋・解説を若干添へたものである。

一、本書の編纂上杉浦正一郎氏の勞を煩はす事が多かつた。こゝに附記して感謝の意を表する。

昭和十六年一月

編者識

俳諧七部集 目次

例言	一
冬の日	一
春の日	一九
曠野	三七
卷之一	四
卷之二	五
卷之三	六
卷之四	七
卷之五	七九
目次	三

俳諧七部集

四

卷之六.....八五

卷之七.....九五

卷之八.....一〇九

員外.....一九

ひさご.....一四九

猿蓑.....一六九

卷之一.....一七二

卷之二.....一八一

卷之三.....一九二

卷之四.....二〇一

卷之五.....二二四

卷之六.....二三八

炭俵.....二三八

上卷.....二四一

下卷.....二七五

續猿蓑.....三〇三

卷之上.....三〇五

卷之下.....三三一

俳諧七部集について.....三七九

目次

五

冬

の

日

尾張五哥仙

全

○狂歌の才士―發句にある竹齋のこと。竹齋は物語中の人物にして、貧にして鈍なる一庸醫なり。狂歌をよくし、尾張にとゞまりて狂詠を殘せり。

○有明の主水―假設の人名なれど、當時京都に「有明」といふ銘酒ありしに因みしか。

○にほひ―色艶。

○日のちりく―日没頃をさふ。

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまりくくのあらしにもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂哥の才士、此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

芭蕉

たそやとばしるかさの山茶花

野水

有明の主水に酒屋つくらせて

荷兮

かしらの露をふるふあかむま

重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき

杜國

日のちりく―に野に米を蒔

正平

わがいほは鷺にやどかすあたりにて

野水

髪はやすまをしのぶ身のほど

芭蕉

いつはりのつらしと乳をしぼりすて

重五

きえぬそとばにすごとくとなく

荷兮

○たえし「絶えし」なり。「堪へし」と解する説もあれど今採らず。又大和物語・謡曲芦刈の傍との説もあり。
○虚家—明家に同じ。

○さかし—嶮し、黠し、兩説あり。
○二の尼—官女の尼となれるものの第二位の人。

○盗人の記念の松—美濃國青野村に熊坂長範物見松あり。
○宗祇の—美濃國郡上郡山田庄宮瀬川のほとりに宗祇の清水あり。東野州常縁、宗祇に古今傳授を受けてこゝまで送り來り、杖を別ちし跡なりと傳ふ。

影法のあかつきさむく火を焼て
あるじはひんにたえし虚家
田中なるこまんが柳落るころ
霧にふね引人ほちんばか
たそかれを横にながむる月ほそし
となりさかしき町に下り居る
二の尼に近衛の花のさかりさく
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ
のり物に簾透顔おぼるなる
いまぞ恨の矢をはなつ聲
ぬす人の記念の松の吹おれて
しばし宗祇の名を付し水
笠ぬぎて無理にもぬる、北時雨

芭蕉 杜國 野水 重五 芭蕉 野水 重五 芭蕉 荷今 杜國 荷今 野水 重五 芭蕉 荷今 杜國 荷今

○日東の李白—石川丈山をいふ。

○巾に木權—汝南王璣嘗て絹帽を載いて曲を打す。玄宗その權上に紅權花一朶を置きしに、曲了つて花墜ちざりしといふ故事による。

○琵琶打—琵琶を弾く人。(慶長版日葡辭典)

○居湯—おりゆ。浴場に設備したる風呂。多く焚場を設けず、別に湯を沸かして入るやうにしたるもの。綾はその移し入るる湯を漉すなり。

冬がれわけてひとり唐萱
しらくと碎けしは人の骨か何
烏賊はるびすの國のうらかた
あはれさの謎にもとけし郭公
秋水一斗もりつくす夜ぞ
日東の李白が坊に月を見て
巾に木權をはさむ琵琶打
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに
箕に鯨の魚をいたゞき
わがいのりあけがたの星孕むべく
けふはいもとのまゆかきにゆき
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て
廊下は藤のかげつたふ也

野水 杜國 重五 芭蕉 野水 重五 芭蕉 荷今 杜國 荷今 野水 重五 芭蕉 荷今 杜國 荷今

○壯年いまだ―杜甫の曲江
對酒「吏情更覺滄洲遠、老
大徒傷未拂衣」による。
(唐詩選)

○ふけれ―鶉の啼くをふけ
るといふ。

○貞徳の富―松永貞徳。長
頭丸と云ふ。洛外に桃園
梅園等の五園を有して晩
年を悠遊自適せり。

○こゆる―越ゆる、肥ゆる、
兩説あり。

○淺香―奥州にあり、かつ
みの名所。

○奥のきさらぎ―實方中將
の北の方の俤。

○小三太―假設の稱にて郎
黨などの名。

○かゞり―かゞるは彌縫の
義。壁の崩壞を防がん爲
め、繩網にて壁を被ひ縛
れるなり。

○いくらの春ぞ―幾歳ぞの
意。

○柿のへた―曲齋が「柿の
たふ」の誤寫なりといへ
るは妄とすべし。
○三線―三味線。

おもへども壯年いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる

霜にまだ見るあさかほの食

野菊までたづぬる蝶の羽あしおれて

うづらふけれとくる重まひきけり

麻呂が月袖に鞆鼓をならすらん

一たけ桃花をたをる貞徳の富

雨こゆる淺香の田螺ほり重うへて

奥おのきさらぎを只なきになく

床重ふけて語ればいとこなる男

縁縁さまたげの恨みのこりし

口おちと瘤フスをちぎるちからなき

埜水

杜國

芭蕉

荷兮

重五

正平

杜國

埜水

荷兮

はせを

野水

明日はかたきにくび送りせん

小三太こに盃とらせひとつうたひ

月は遅かれ牡丹ぬす人

繩あみのかゞりはやぶれ壁落て

こつことのみ地藏切町

初はなの世とや嫁よめのいかめしく

かぶかるいくらの春ぞかはゆき

櫛くばこに餅もちすゆるねやほのかなる

うぐひす起よ紙燭とぼして

篠ふかく梢は柿の帯おびさびし

三線からん不破のせき人

道すがら美濃で打ける碁を忘る

ねざめねのさても七十

重五

芭蕉

杜國

重五

荷兮

杜國

野水

かけい

芭蕉

野水

重五

芭蕉

杜國

○唐輪―髻より上を二つに分け頂の上にて二つの輪に作る髪の結ひ方。
 ○臨濟―臨濟義玄禪師の母の佛となす説あれども、必しも故事に執して解する要なかるべし。
 ○虚に聲きく―隻手の聲を聞くと同断の心境。禪門の公案。
 ○ひとりば云々―此の句平家物語大原御幸の寂光院の佛。
 ○三日の花―三月三日桃花の節に官女等の美鳥珍禽を合せて競ふさま。
 ○しらかみいさむ―出羽より越後へ通ふ途中に、白髪・獨活刈の二門神ありとなす説等あり。なほ考ふべし。

奉加めす御堂に金こがねうちになひ
 ひとつの傘カサの下もと舉ありさす
 蓮池ハスに鶯ウの子遊あそぶ夕ゆふま暮くれ
 一ひとまどまどに手てづから薄うす様さまをすき
 月にたてる唐輪カガの髪かみの赤あか枯かて
 戀こひせぬぬきぬた臨濟リンをまつ
 秋蟬アキの虚うつらに聲こゑきくしづかさ
 藤フジの實みつたふふ年としほつちり
 袂たもとより硯いをひらき山やまかけに
 ひとりば典侍テンの局まか内侍ないか
 三さんヶヶの花はな鸚ひん鵒おつ尾おながの鳥とりいくさ
 しらかみいさむ越えの獨活どく刈かり

重おも五ご 荷か今け 杜と國こ 野の水みづ 荷か今け 野の水みづ 芭は蕉せう 重おも五ご 野の水みづ 荷か今け 野の水みづ 芭は蕉せう 重おも五ご 野の水みづ 荷か今け 野の水みづ 芭は蕉せう

○霽―此字古書に「しづくれし」に宛て用ひたる例多し。

つえをひく事僅わずかに十歩
 つゝみかねて月とり落す霽はらかな
 こほりふみ行水ゆきのいなづま
 齒は朶だの葉はを初狩はつ人の矢やに負まて
 北きたの御門ごもんをおしあけのはる
 馬糞う搔かあふぎに風かぜの打うかすみ
 茶ちやの湯者ゆおしむ野のべの蒲公ぼ英えい
 らうたげに物よむ娘むすめかしづきて
 燈籠とうふたつになさけくらぶる
 つゆ萩はぎのすまふ力ちからを撰えばれず
 蕎麥そばさへ青あおし滋賀しや樂がの坊ぼ
 朝月あさ夜よ双ふた六むらちの旅たびねして
 紅花べに買かみちにほととぎすきく

重おも五ご 荷か今け 杜と國こ 野の水みづ 荷か今け 野の水みづ 芭は蕉せう 重おも五ご 野の水みづ 荷か今け 野の水みづ 芭は蕉せう

○あふぎ―熊手の一種。

○かしづきて―茶人が娘を秘藏して大切にするなり。

○すまふ―動詞。
 ○力を選ばれず―勝負を判じ難しとの意。
 ○滋賀樂―近江國甲賀郡信樂。

冬ふゆのの日ひ
 九

○おのが妻こそ前出萬葉集の歌の句による。

○吹ぬ「吹かぬ」と訓むべし。

○萩織る笠萩にて作れる笠なるべし。

○振らする振賣即ち市中を呼び歩きつゝ賣らするなり。

○胡麻千代祭七部搜に、上加茂の川上に胡麻を好み給ふ稻荷神あり、その祭をいふと云へど明かならず。

○岩倉洛北岩倉村。

○三平三平二滿の語を醜婦の義に用ひ、オタフクなどと訓み來れり。

○冬待つ納豆當時本郷附近には麴屋多かりしより納豆を附けたり。

○花に泣花に泣きしの意。

○欸冬花の山吹に非ず、露の露なり。これを烟草の如くして飲むこと慶長見聞集卷一等に見ゆ。肺虚の薬といふ。

○釵を鑄る前句の白燕に因み、玉燕釵の故事などをとり合せたる作意なり。

○八十年を三つ見る七十歳なり。

○七夕のつま織女が董永の孝心に感じてその妻となりし故事によるとの説あり。

○桂の花一月をいへり。苔むとは七日の月未だ滿ぜざればなり。

炭賣のをのがつまこそ黒からめ

重五

ひとの粧まひを鏡磨トギ寒

荷分

花はな蘇馬骨の霜に咲かへり

杜國

鶴見るまどの月かすかなり

野水

かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日

芭蕉

萩織るかさを市に振まする

羽笠

賀茂川や胡磨千代祭り儼近み

荷分

いは岩倉くらの禊なつかしのころ

重五

おもふこと布搗哥にわらはれて

野水

うきははたちを越る三平三平

杜國

捨すてられてくねるか鴛の離れ鳥

羽笠

火ヒをかぬ火燧なき人を見む

芭蕉

門守の翁に紙子かりて寝る

重五

血刀かくす月の暗きに

荷分

霧下りて本郷の鐘七つきく

杜國

ふゆまつ納豆たしくなるべし

野水

はなに泣櫻なみの儼とすてにける

芭蕉

僧ものいはず欸冬を吞

羽笠

白燕濁らぬ水に羽はを洗ひ

荷分

宣旨かしこく釵かんざしを鑄る

重五

八十年を三つ見る童母ワラハもちて

野水

なかだちなをむる七夕のつま

杜國

西南に桂のはなのつぼむとき

羽笠

蘭のあぶらしめに木きうつ音

芭蕉

賤の家に賢なる女見てかへる

重五

釣瓶つりびんに粟をあらふ日のくれ

荷分

○籠輿―舊説多くろうごしと訓み牢輿と解せり。

○泥の上に―莊子の塗中に尾を曳く龜の故事を俳諧化する手段。

○水のみくすり―注解に、典藥頭水毒を解する御藥を奉るなりと云へり。

○芥子あま―所謂おけし。女兒の髪を頂にのみ小圓形に残したるをいふ。
○飯臺―食卓。僧寮などに用う。

江を近く獨樂菴と世を捨て雜重五
 我月出よ身はおぼるなる春月杜國
 たび衣笛に落花を打拂春花羽笠
 籠輿ゆるす木瓜の山あい春野水
 骨を見て坐到に泪ぐみうちかへり雜芭蕉
 乞食の蓑をもらふしのめ雜荷兮
 泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て雜杜國兮
 御幸に進む水のみくすり雜重五
 ことにてる年の小角豆の花もろし夏野水
 萱屋まばらに炭團つく日雜羽笠
 芥子あまの小坊交りに打むれて雜荷兮
 おるはすのみたてる蓮の實秋芭蕉
 しづかさ飯臺のぞく月の前秋月重五

○元政―母に孝なりし深草の元政上人。
 ○しらす―大家の玄關先、庭先などの白き砂しける處。
 ○水干―水張にして干したる絹の狩衣。
 ○山茶花匂ふ―最初の本枯の巻の脇匂と首尾照應せり。

○難面―つれなく、つれなし等と訓む説もあれど、なほつれなきと連體形によむべし。つれなき牛は霰の打つにも驚かざる牛なり。

露をくきつね風やかなしき秋杜國
 釣柿に屋根ふかれたる片庇秋羽笠
 豆腐つくりて母の喪に入雑野水
 元政の草の袂も破ぬべし雑芭蕉
 伏見木幡の鐘はなをうつ春花かけぬ
 いろふかき男猫ひとつを捨かねて春杜國
 春のしらすの雪はきをよぶ春重五
 水干を秀句の聖わかやかに雑野水
 山茶花匂ふ笠のこがらし冬うりつ

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰羽笠
 樽火にあぶるかれはらの松荷兮
 冬の日
 一七

○ちやせん一束にうしろ
に束ねたる髪。茶筌に似
たればいふ。
○樽火に一樽を火になり。

俳諧七部集

一八

とくさ^{カリ}下着に髪をち^茶やせんして
檜^{しろがね}筌に宮をやつす朝露
銀^{しろがね}に蛤かはん月は海
ひだりに橋をすかす岐阜山

重五
杜國
芭蕉
埜水

貞享甲子歲

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

春の日全

○並松一佐屋街道の松ならむと云。

曙見んと、人々の戸扣きあひて、熱田のかたにゆきぬ。渡し舟さはがしくなりゆく比、并松のかたも見へわたりて、いとのだかなり。重五が枝折をける竹塙ほどちかきにたちより、けさのけしきをおもひ出侍る。

二月十八日

春めくや人さまの伊勢まゐり 荷 兮
櫻ちる中馬ながく連 重 五

○立て一曲齋は立ててとよみ、西馬は立ちてとよめり。

山かすむ月一時に館立て 雨 桐
鎧ながらの火にあたる也 李 風
しほ風によく聞ば鷗なく 昌 圭

○笛を戴く一笛は須磨寺に傳ふる青葉笛。但し平家物語等によれば敦盛の携へたりしは實は小枝笛にして青葉笛にはあらず。

くもりに沖の岩黒く見へ 執 筆
須磨寺に汗の帷子脱かへむ 重 五
をのくなみだ笛を戴く 荷 兮

春の日

○花と竹とに―花・竹をつくるに忙しとなり。

いく春を花と竹とにいそがしく
弟も兄も鳥とりにゆく
昌圭
李風

○なら坂―奈良市の北。京都に至る通路。

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら
且藁

あもしろふかすむかたの鐘
野水

春の旅節供なるらん袴着て
荷分

口すゝぐべき清水ながるゝ
越人

松風にたをれぬ程の酒の酔
羽笠

賣のこしたる虫はなつ月
執筆

笠白き太秦祭過にけり
野水

菊ある垣によい子見てをく
且藁

表町ゆづりて二人髪剃ん
越人

○曉いかに―誰かきて思の家を出つらむと云へる句に「曉いかに車やる音」と宗祇つけたり。車は法華經の羊車鹿車大白牛車の喩へなり。

曉いかに車ゆくす
荷分

鱈負ふて大津の濱に入にけり
且藁

何やら聞ん我國の聲
越人

旅衣あたまばかりを蚊やかかりて
羽笠

萩ふみたをす萬日のほら
野水

里人に薦を施す秋の雨
越人

月なき浪に重石をく橋
羽笠

ころびたる木の根に花の鮎とらん
野水

諷盡せる春の湯の山
且藁

のどけしや筑紫の袂伊勢の帯
越人

内侍のえらぶ代々の眉の圖
荷分

物おもふ軍の中は片わきに
羽笠

名もかち栗とちび申上ゲ
野水

春の日

二五

○萬日の原―萬日功德の法會を行ふ原。

萩ふみたをす萬日のほら

里人に薦を施す秋の雨

月なき浪に重石をく橋

ころびたる木の根に花の鮎とらん

諷盡せる春の湯の山

のどけしや筑紫の袂伊勢の帯

内侍のえらぶ代々の眉の圖

物おもふ軍の中は片わきに

名もかち栗とちび申上ゲ

○軍の中は―新田義貞、勾當内侍の倂なりと(大鏡)。

○筑紫の袂伊勢の帯―温泉場の湯女、諸國より集まるものの風情ならむ。

○湯の山―古くは多く有馬を云ふ。

○大年―大晦日。

大年は念佛となふる惠美酒棚
ものごとと無我によき隣也
越人

○宮古―都。

朝夕の若葉のために枸杞うへて
宮古に廿日はやき麥の粉
羽笠

○一夜かる―攝津金龍寺の千觀阿闍梨が、寺役の暇に馬を追ひて往來の旅客を助けし故事の傍なりと(大鏡)。

一夜かる宿は馬かふ寺なれや
こは魂まつるきさらぎの月
越人

○きさらぎの月―二月の魂祭は十五日なり(報恩經)。

陽炎のもへのこりたる夫婦にて
春雨袖に御哥いたゞく
荷人

田を持って花みる里に生けり
力の筋をつぎし中の子
野水

漣や三井の末寺の跡とりに
高びくのみぞ雪の山
越人

○廿九日の月―大鏡に十六夜日記の傍といへるは鑿に過ぎたり。

見つけたり廿九日の月さむき
君のつとめに氷ふみわけ
羽笠

三月十六日且藁が田家にとまりて

蛙のみさしてゆゝしき寐覺かな
野水

○岩木―亞炭。

額にあたるはる雨のもり
蕨煮る岩木の臭き宿かりて
越人

まじく人をみたる馬の子
立てのる渡しの舟の月影に
冬文

蘆の穂を摺る傘の端
磯ぎはに施餓鬼の僧の集て
執筆

岩のあひより藏みゆる里
雨の日も瓶焼やらん煙たつ
野水

ひだるき事も旅の一つに
越人

○旅の一つに―曲齋「旅の一つぞ」の誤とすれどなほ之にてよろしからむ。

尋たづねよる坊主は住すままず錠じやうありて
解とてやを（蓋）かん枝えだむすぶ松
野水

今宵は更たりとてやみぬ。同十九日荷兮室にて

咲あわけの菊きくには（を）あ（を）し（を）き（を）白露（ま）ぞ
越人

○咲わけの以下前の「解てやをかん」についでけしなり。
○秋の和名源順が和名抄の秋の部の稿に取かかりたりとの作意。

秋あきの和（わ）名（な）にか（を）ゝ（を）る（を）順（じゆん）
冬文

初雁はつかりの聲こゑにみ（を）づ（を）から火（ひ）を打（う）ぬ
冬文

別（わか）の月（つき）になみだ（な）あらはせ
旦（あ）荷（か）兮（を）

跡（あと）ぞ花（はな）四（よ）の宮（みや）よりは唐輪（たうりん）にて
野水

○四の宮—洛東山科の附近。
○唐輪—八頁頭註参照。

春（はる）ゆく道（みち）の笠（かさ）もむ（を）つかし
野水

永（とこ）き日（ひ）や今朝（けさ）を昨日（けふ）に忘（わす）るらん
荷兮

○簀の子茸—狐の傘とも云ふ、一日にして成長す。

簀（す）の子茸（こけ）生（な）ふる五月雨（ごご）の中
越人

○紹鷗—堺の人、名高き茶の湯者、利休の師也。

紹鷗（せうおう）が瓢（ひょう）はありて米（こめ）はなく
野水

○連歌のもと—もとは會主。

連哥（れんか）のもとにあたるいそ（いそ）がし
冬文

○瀧壺に—後醍醐院の御時吉田家にての御連歌に瀧の響の爲め開分かれざりしを、爲教少將山より柴を折り来りて瀧の落つる所に塞ぎ、水の音をとめし故事（井蛙抄）による。

瀧壺（たきう）に柴（しば）押（お）ま（を）げ（を）て音（ね）とめん
越人

岩（いわ）苔（こけ）とりの籠（かご）にさ（を）げ（を）られ
旦（あ）藁（わら）

む（を）さ（を）ぼり（を）に帛（ぬい）着（き）てありく世（よ）の中（なか）は
冬文

菴（あま）二枚（ふたまい）もひ（を）ろ（を）き我（われ）菴（あま）
越人

朝（あ）毎（まい）の露（つゆ）あはれ（を）さに麥（むぎ）作（し）ル
旦（あ）藁（わら）

暮（くれ）うちを送（おく）るきぬ（を）の月（つき）
野水

風（かぜ）のなき秋（あき）の日（ひ）舟（ふね）に網（あみ）入（い）よ
荷兮

鳥羽（とりば）の湊（みなと）の（を）あ（を）どり（を）笑（わら）ひに
冬文

あ（を）ら（を）まし（を）の（を）ざ（を）こ（を）ね（を）筑摩（つくま）も見（み）て過（す）ぬ
野水

つ（を）ら（を）く（を）一（ひと）期（き）聳（たか）の名（な）もなし
荷兮

我（われ）春（はる）の若（わか）水（みづ）汲（ひ）に晝（ひる）起（た）て
越人

餅（もち）を喰（く）つ（を）いは（を）ふ君（きみ）が代（しろ）
旦（あ）藁（わら）

山（やま）は花（はな）所（ところ）のこ（を）ら（を）ず遊（あそ）ぶ日（ひ）に
冬文

春の日

○あらし—心あて。
○ざこね—雑魚寝。洛北大原などの古き俗習。
○筑摩—近江坂田郡。筑摩祭に名高し。

くもらずくもらずずてらてらずず雲雀鳴也 荷 兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のああぶぶなき岨そはのくくづづれ哉 越 人
 蝶水のみみにおるる、岩はし 舟 泉
 ささららぎぎや餅洒もちすべき雪ありて 聽 雪
 行幸のためために洗せんふ土かは器ら 蠡 髭
 朔日を鷹もつ鍛冶かじのいかめしく 荷 兮
 月なき空の門はやくやく、あけ 執 筆

春

昌陸の松とは盡ぬ御代の春 利 重

○餅酒すー餅米をさらす謂か。木曾名物氷餅か等曲齋云へり。
 ○鷹もつ鍛冶ー大鏡に細川三齋等、一國一城の主の鍛冶する人をさすかと云へり。
 ○昌陸ー里村氏、連歌の宗匠たり。玉松の葉のあり數や御代の春の句ある由(標註)。

○芍薬園ー貞徳の五園の一。

元日の木の間の競馬足ゆるし 重 五
 初春の遠里牛のなき日哉 昌 圭
 けさの春海はほどほどあり麥の原 雨 桐
 門は松芍薬園の雪さむし 舟 泉
 鯉の音水ほの聞く梅白し 羽 笠
 舟ふねのの小松に雪の残けり 且 藁
 曙の顔牡丹霞にひらきけり 杜 國
 腰てらす元日里の睡りかな 犀 夕
 星はらくらくかすまぬ先の四方の色 吞 霞
 けふとても小松負ふらん牛の夢 聽 雪
 朝日二分柳の動く匂ひかな 荷 兮
 先ま明あて野の末まひくき霞哉 同
 芹摘ひとてこけて酒なき瓢哉 且 藁

春の日

○腰てらすー白氏文集卷卅七「暖床斜臥日睡腰」。

のがれたる人の許へ行とて

みかへれば白壁いやし夕がすみ
古池や蛙飛こむ水のをと
傘張の睡り胡蝶のやどり哉
山や花墻根くの酒ばやし
花にうづもれて夢より直に死んかな

春野吟

足跡に櫻を曲る菴二つ
麓寺かくれぬものはさくらかな
榎木まで櫻の遅きながめかな

饞別

藤の花たぶらつぶいて別哉
山畑の茶つみをかざす夕日かな

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ

夏

ほととぎすその山鳥の尾は長し
郭公さゆのみ焼てぬる夜哉
かつこ鳥板屋の脊戸の一里塚
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉
若竹のうらふみたる雀かな
傘をたしまで螢みる夜哉

武藏坊をとぶらふ

すゞかけやしてゆく空の衣川
逢坂の夜は、笠みゆるほどに明て
馬かへておくれたりけり夏の月

春の日

三三

○酒ばやし—酒家の軒先に杉の葉を束ねて吊したる看板。
○花にうづもれて—西行が望月の頃の歌をふめり。
○足跡に—大鏡に撰集抄の故事を引けり。

○山鳥の尾は—人麿の「あしびきの山鳥の尾の」の歌をふめり。

○すゞかけ—繡毬花。此花の如き篠掛の衣を着て奥に下り此衣川にて死しけると古しへをおもひし心なりと(通旨)。

越人 芭蕉 重五 龜洞 越人 杜國 李風 荷兮 越人 重五

同

九白 李風 越人 杜國 龜洞 舟泉

商露 聽雪

○知足之足常足—老子四十
六章の語。

○雜水—雜炊。

○箒木は—信濃園原の帚木
に因める作意。

○萱草—花は黄褐色單瓣又
は黄赤色重瓣にして色彩
強し。

○譬喩品—法華經にあり。
句は此六月の暑さは猶火
宅にあるがごとしとの
意。

老聃曰知足之足常足

夕がほに雜水あつき藁屋哉
 箒木の微雨こぼれて鳴蚊哉
 はしき木はながむる中に昏にけり
 萱草は随分暑き花の色
 蓮池のふかさわする、浮葉かな
 曉の夏陰茶屋の遅きかな
 夏川の音に宿かる木曾路哉
 譬喩品ノ三界無安猶如火宅といへる心を
 六月の汗ぬぐひ居る臺かな
 越人
 柳雨
 塵交
 荷兮
 同
 昌圭
 重五
 越人

秋

脊戸の畑なすび黄ばみてきりくす
且藁

貧家の玉祭

○雲折々—山家集に「なか
なかに時々雲のかゝるこ
そ月をもてなすかざりな
りけれ」。

玉まつり柱にむかふ夕かな
 雁きゝてまた一寐入する夜かな
 雲折々人をやすむる月見哉
 山寺に米つくほどの月夜哉
 瓦ふく家も面白や秋の月
 八島をかける屏風の繪をみて
 越人
 雨桐
 芭蕉
 越人
 野水

具足着て顔のみ多し月見舟
同

待戀

乙ぬ殿を唐黍高し見おるさん
荷兮

閑居増戀

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな
 朝良はすゑ一りんに成にけり
 荷兮
 舟泉

春の日

○末一輪—淨瑠璃などの末
一段にもどりしなり。

冬

○芭蕉翁を貞享元年のことなり。

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ 杜國

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申 大垣住 如行

○葬の子一葬の實。

雪のはら葬の子の薄かな 昌碧

馬をさへながむる雪のあした哉 芭蕉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ 越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の氷ふみわる名残かな 杜國

隠士にかりなる室をもうけて

あたらしき茶袋ひとつ冬籠 荷分

貞享三丙子年仲秋下浣

寺田重徳板

阿羅野

上下員外

○蓬左―熱田神宮を蓬萊宮
といふより、熱田の西の
意即ち名古屋をいふ。

○ひととせ―貞享元年。

○柳櫻の錦を―素性法師
「見渡せば柳櫻をこき交
ぜて都ぞ春のにしきなり
ける」。

○糸遊の―朗詠集に「霞晴
れ緑の空も長閑けてあ
るかなきかに遊ぶ糸遊
赤人」。

○姫ゆりの―山家集に「雲
雀上るあら野に生る姫百
合の何につくともなき心
哉」。

○無景―廣大にして廣くき
はまりなき意なり(通旨)。

尾陽蓬左樞木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ。何故に此
名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひととせ此郷に旅寐せ
しおり^(折)の云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相續て春の日
また世にかゞやかす。げにや衣更着やよひの空のけしき、柳櫻の錦
を争ひ、てふ鳥のをのがさま^(目)なる風情につきていさゝか實をそ
こなふものもあればにや、いと^(系)いふのいとかなる心のはしの、
有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにもつかず、雲雀の大空には
なれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原
の野守とはなれるべらし。

元祿二年彌生

芭蕉桃青

荒野集目錄

卷之一

花 郭公 月 雪

卷之二

歳旦 初春 仲春 暮春

卷之三

初夏 仲夏 暮夏

卷之四

初秋 仲秋 暮秋

卷之五

初冬 仲冬 歳暮

卷之六

雜

卷之七

名所 旅 述懷 戀 無常

卷之八

釋教 神祇 祝

員外

曠野集 卷之一

花 三十句

よしのにて

これはく／＼とばかり花の芳野山 貞室
 我まゝをいはする花のあるじ哉 路通
 薄曇りけだかくはなの林かな 信徳
 はなのやまどことらまへて哥よまむ 晨風
 暮 淋 し 花 の 後 の 鬼 瓦 友 五
 山里に喰ものし(強ひ)ゐる花見かな 尙 白
 何事ぞ花みる人の長刀 去 來
 みねの雲すこしは花もまじるべし 野 水

曠野集 卷之一

四一

○これはく／＼と未琢撰の一本草(寛文九年刊)に出づ。

○みねの雲―大鏡に、堀川百首―色まがふ誠の雲やまじるらむころは櫻の四方の山の端」を引けり。

○下々の下の—山崎の宗鑑
その庵に—上の客人立か
へり中の客人日がへりと
まる客人下の下—と書せ
る額を掲げおきたりと。

○いろはあげけり—伊呂波
の手習ひを習ひ終へたり
との意。

○おらし—多し。

はなのなか下戸引て来るかいな哉 龜洞
 下々の下の客といはれん花の宿 越人
 はなの山常折くぶる枝もなし 一井
 見あげしがふもとに成ぬ花の瀧 津島俊似
 兄弟のいろはあげり花のとき 鼠彈
 ちるはなは酒ぬす人よ 舟泉
 冷汁に散てもよしや花の陰 胡及
 はつ花に誰が傘ぞいままし 長虹
 柴舟の花咲にけり宵の雨 津島ト枝
 折あるときになりて逃けり花の枝 岐阜鷗歩
 連だつや従弟はあらし花の時 荷兮
 疱瘡の跡まだ見ゆるはな見哉 傘下
 あらけなや風車賣花のとき 薄芝

○なりあひ—成行に任ずること。

○こけら—柿。板屋を葺くに用ひる薄き板。

○櫃の木の—何丸が櫃木堂
主人に對する挨拶の句と
せるは誤れり。洛外鳴瀧
なる三井秋風を訪へる折
の吟なること甲子吟行等
によりて明かなり。
○二十句—實は十九句にし
て一句脱漏せしなるべし。

花にきてうつくしく成心哉 たつ
 山あひのはなを夕目に見出したり 心苗
 おもしろや理窟はなしに花の雲 越人
 なりあひやはつ花よりの物わすれ 野水
 獨来て友選びけり花のやま 冬松
 花鳥とこけら葺ある尾上かな 冬文
 首出して岡の花見よ蛇とり 荷兮
 酒のみ居たる人の繪に
 月花もなくして酒のむひとり哉 芭蕉
 ある人の山家にいたりて
 櫃の木のはなにかまはぬすがた哉 同

杜宇二十句

○目には一言水撰の江戸新道(延寶六年刊)に出で「鎌倉にて」と前書あり。

鳥籠の憂目見つらん郭公季吟

目には青葉山ほととぎす初がつほ素堂

いそがしきなかに聞けり蜀魄釣雪

蠟燭のひかりにくしやほととぎす越人

おひし子の口まねするや時鳥津島松下

跡や先氣のつく野邊の郭公重五

ほととぎすどれからさかむ野の廣さ柳風

ある人のもとにて發句せよと有ければ

ほととぎすはかりもなき鳥かな鼠彈

晴ちぎる空鳴行やほととぎす落梧

蚊屋臭き寐覺うつゝや時鳥一髮

三聲ほど跡のおかしや郭公同

○晴れちぎる十分晴れたる。

淀にて

○夜舟伏見、大阪間を航する淀川の乗合舟。

ほととぎす十日もはやき夜舟哉風泉

嬉しさや寐入らぬ先のほととぎす岐阜杏雨

あぶなしや今起て聞郭公傘下

くらがりや力がましきほととぎす同

馬と馬よばりあひけり時鳥鈍可

たゞありあけの月ぞのこれると吟じられしに

哥がるたにくき人かなほととぎす大津智月

うつかりとうつぶさむたり時鳥李桃

うつかりと春の心ぞほととぎす市山

月三十句

かるくと笹のうへゆく月夜哉十二歳梅舌

○ぼひとりがち奪取り勝。

○屋わたり家移り。

○いかい一殿しの音便。いかい事」は十分の意。

○年に十二は續古今集の「月毎に見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき」紀納言の詩句「十二廻中無勝於此夕之好」など同工。

それがしも月見る中の獨かな 湍水
 月ひとつばひとりがちの今宵哉 一雪
 雨の月どころもなしの薄あかり 越人
 けうとさに少脇むく月夜哉 昌碧
 屋わたりの宵はさびしや月の影 津島市柳
 おかしげにほめて詠る月夜哉 一髮
 どこまでも見とをす月の野中哉 長虹
 峠迄硯抱て月見かな 任他
 一つ屋やいかいこと見るけふのつき 龜洞
 名月は夜明るきはもなかりけり 越人
 名月やとしに十二は有ながら 文鱗
 名月やかいつきたてつなぐ舟 昌碧
 めいげつやはだしでありく草の中 傘下

名月や鼓の聲と犬のこゑ 二水
 見るものと覚えて人の月見哉 野水

名月の心いそぎに

むつかしと月を見る日は火も焼かじ 荷兮
 いつの月もあとを忘れて哀也 同
 名月や海もおもはず山も見ず 去來
 めいげつや下戸と下戸とのむつまじき 胡及
 めいげつはありきもたらぬ林かな 釣雪
 宵に見し橋はさびしや月の影 一髮

十三夜

影ふた夜たらぬ程見る月夜哉 杉風

朔日

暮いかに月の氣もなし海の果 荷兮

○いつの月も「今宵の月の類ひなきに過ぎ来し月の事をば忘れ果て詠入る事は哀れに淺はかなる心ならしと願ふにや」通旨。

○たしなきし少き。

見る人もたしなき月の夕かな

同

三日

何事の見たてにも似ず三かの月

芭蕉

四日

夕月夜あんどんけしてしばしみむ

ト枝

五日

何日とも見さだめがたや宵の月 伊豫一泉

六日

銀川あまの見習ふ比や月のそら 岡崎鶴聲

七日

能よきほどにはなして歸る月夜哉 岐阜一髮

○何事の―笈日記(元禄八年刊)・泊船集(同十一年刊)等には「有とあるた」とへにも似ず三日の月」とありて、大曾根の成就院よりの歸途、又其院にての作とせり。

雪二十句

大津にて

○船頭殿の―謠曲自然居士「あゝ船頭殿の御顔の色こそなほつて候へいやちつともなほり候まじ」の文句による。
○いざ行かむ―花摘(元禄三年刊)等には上五「いざさらば」とあり、赤冊子によれば「いざさらば」と再案に改めし由。
○加生―凡兆の前號。

雪の日や船頭どの、顔の色 其角
いざゆかむ雪見にころぶ所まで 芭蕉
竹の雪落て夜るなく雀かな 塵交
かさなるや雪のある山只の山 京加生
車道雪なき冬のあした哉 加賀小春
はつ雪を見てから顔を洗けり 越人
はつ雪に戸明ぬ留主の菴かな 是幸
ものかげのふらぬも雪の一つ哉 松芳
くらき夜に物陰見たり雪の隈 二水
雪降て馬屋にはいる雀かな 梟仙
夜の雪おとさぬやうに枝折らん 岐阜除風

ゆきの日や川筋ばかりほそくと
 初雪やおしにぎる手の寄麗也
 雪の江の大舟よりは小舟かな
 雪の朝から鮭わくる聲高し
 雪の暮猶さやけしや鷹の聲
 ちらくや淡雪かゝる酒強飯
 はつ雪や先草履にて隣まで
 はかられし雪の見所有り所
 舟かけていくかふれども海の雪

鶯 汀
 傘 下
 芳 川
 冬 文
 桂 夕
 荷 兮
 路 通
 野 水
 芳 川

曠野集 卷之二

歳旦

○二日にも一笈の小文に
 「宵のとし空の名残惜し
 まむと酒のみ夜ふかして
 元日寝わすれたれば」と
 前書あり。
 ○伊勢が家—古今集に出る
 伊勢の歌に「家を賣りて
 よめる、あすか川淵にも
 あらぬわが宿もせにかは
 り行くものにぞありけ
 る」。
 ○歌か否—宗祇螺貝の不形
 なるを見て連歌によむべ
 きものにあらずといへり
 と(大鏡)。
 ○柏—柏は伊勢北野の神供
 にも用ひて神々しくめで
 度ものなれば、初春のか
 ざりにも用ゆべきにさは
 なくて唯年ふるよと也
 (通旨)。
 ○元朝や—山家集に「何と
 なぐ春になりぬときく日
 より心にかゝる三吉野の
 山」。
 ○ふたつこそ—白氏文集の
 「忽因時節驚年幾四十如
 今缺一年」の一年を二年

二日にもぬかりはせじな花の春
 芭蕉
 たれ人の手がらもからじ花の春
 釋古梵
 わか水や凡千年のつるべ繩
 風鈴軒
 松かざり伊勢が家買人は誰
 其角
 うたか否連歌にあらずにし肴
 文鱗
 月雪のためにもしたし門の松
 去來
 かざり木にならで年ふる柏哉
 一品
 元朝や何となけれど遅ざくら
 路通
 元日は明すましたるかすみ哉
 加賀一笑
 齒固に梅の花かむにほひかな
 大垣如行
 ふたつ社老にはたらねとしの春
 岐阜落梧
 若水をうちかけて見よ雪の梅
 龜洞
 伊勢浦や御木引休む今朝の春
 同

にとりなしたる作と大鏡にいへり。
 ○御木引―大神宮御造營の用材を引くこと。
 ○小柑子―セウユウジ。伊勢物語に石の上にはしりかゝる水はせうかうじ栗の大ききにてこぼれおつとあるによると(大鏡・通旨)。

○木どり―西馬は「琵琶に月形あるより云か」といへり。木どりは木をその形に造り成すこと。
 ○はみちる―食み散る。

○ふかいの面―能の面にて浮舟百萬龍田源氏供養等に用ふ。

○野の宮―嵯峨有栖川にあり。齋宮潔齋のために籠る宮。

○大服―元日の點茶をいふ。

○どうぶくら―胴膨。中心、最中、眞盛り等の意。春は曙とさへいふ位なれば、曙は春の初にして且つ最も盛りともいふべき時なり。
 ○賢魚―堅魚を誤れるなるべし。

ことぶきの名をつけて見む宿の梅 昌
 去年の春ちいさかりしが芋頭 元
 小柑子栗やひろはむまつのかど 舟
 とし男千秋樂をならひけり 同
 山柴にうら白まじる竈かな 重
 松高し引馬つるゝ年おとこ 釣
 月花の初は琵琶の木どり哉 同
 連てきて子にまはせけり萬歳樂 一
 うら白もはみちる神の馬屋哉 胡
 見おぼえむこや新玉の年の海 長
 今朝と起て繩ぶしほどく柳哉 鼠
 さほ姫やふかいの面いかならむ 同
 蓬萊や舟の匠のかんなくず 湍
 水

佛より神ぞたうとき今朝の春 京と
 のゝ宮やとしの旦はいかならん 朴
 かざりにとたが思ひだすたはら物 冬
 正月の魚のかしらや炭だはら 傘
 けさの春寂しからざる閑かな 冬
 あいゝに松なき門もおもしろや 柳
 大服は去年の青葉の匂哉 防
 鶯の聲聞まいれ年おとこ 大
 傘に齒朶かゝりけりえ方だな 山
 袖すりて松の葉契る今朝の春 昌
 たてゝ見む霞やうつる大かゞみ 夕
 曙は春の初やだうぶくら 野
 はつ春のめでたき名なり賢魚々 同
 越
 人

○麥厚し―田舎にて鎮守參詣に捧げし麥ならん(標註)。

○巳の年―元祿二年即ち曠野集撰集の年なり。

○我等しき―我等くらゐの。

初春

初夢や濱名の橋の今のさま 同
しづやしづ御階にけふの麥厚し 同
萬歳のやどを隣に明にけり 同
巳のとしやむかしの春のおぼつかな 同
我は春目かどに立るまつ毛哉 僧般齋
我等式が宿にも來るや今朝の春 貞室

○磯菜―磯邊の若菜。

若菜つむ跡は木を割畑哉 越人
精出して摘とも見えぬ若菜哉 野水
七草をたゝきたがりて泣子かな 津島俊似
女出て鶴たつあとの若菜哉 加賀小春
側濡て袂のおもき磯菜かな 藤羅

○石釣て―石を持ち運びて。

○鷹すゑて―拾遺集に「家づとにあまたの花も折るべきにねたくも鷹をすゑてける哉」。

○すはい―すはえ。細き枝をいふ。

○網代民部―伊勢山田の人、足代弘氏。神風館一世と號す。天和三年没四十四歳。その息は雪堂といへり。

吾うらも残してをかぬ若菜哉 岐卓素秋
石釣てつぼみたる梅折しけり 玄察
鷹居て折にもどかし梅の花 鷗歩
むめの花もの氣にいらぬけしき哉 越人
藪見しれもどりに折らん梅の花 落梧
梅折てあたり見廻す野中かな 一髮
華もなきむめのすはいぞ頼もしき 冬松
みのむしとしれつる梅のさかり哉 蕉笠

網代民部の息に逢て

梅の木になを(ほ)やどり木や梅の花 芭蕉
うぐひすの鳴そこなへる嵐かな 長良若風
鶯の鳴や餌ひろふ片手にも 去來
あけぼのや鶯とまるとまはね釣瓶 伊賀一桐

鶯にちいさき藪も捨られじ津島一 笑
 うぐひすの聲に脱たる頭巾哉同 市柳
 鶯になじみもなきや新屋敷同 夢々
 うぐひすに水汲こぼすあした哉 梅舌
 さとかすむ夕をまつの盛かな 野水
 行くて程のかはらぬ霞哉 塵交
 行人の蓑をはなれぬ霞かな 冬文
 かれ芝やまだかげろふの一二寸 芭蕉
 かげろふや馬の眼のとろくと 傘下
 水仙の見る間を春に得たりけり 路通
 蝶鳥を待るけしきやものゝ枝 荷兮

當座題

さし木

つきたかと兒のぬき見るさし木哉 舟泉

接木

つまの下かくしかねたる繼穂かな 傘下

椿

曉の釣瓶にあがるつばさかな 荷兮

同

藪深く蝶氣のつかぬつばさ哉 卜枝

春雨

はる雨はいぜの望一がこより哉 湍水

同

春の雨弟どもを呼でこよ 鼠彈

白尾鷹

はやぶさの尻つまげたる白尾哉 野水

○枯芝や一笈の小女には中
 七「や」かげろふの」と
 あり。

○つまの下一軒の端をいふ
 (標註)。

○望一—山田の人、杉木氏。
 盲人にして俳諧をよく
 す、句を作る毎に紙捻に
 書かせ、竹筒に入れ置き
 しといふ。

○白尾鷹—縹尾の鷹なり。

○すごくと一撰註に「翁曰、相似たる句は集に出ず時わざと一所に置侍れと也」といへり。

○蘭亭の主人一王羲之をいふ。鵝を愛して書にかへし故事あり。

蜘蛛の井（こゝろ）に春雨かゝる雫かな 奇生
 立白（たてしろ）に若草見たる明屋哉 十一歳龜助
 すごくと親子摘けりつくつくし 舟泉
 すごくと摘（と）やつまずや土筆 其角
 すごくと案山子のけけり土筆 蕉笠
 土橋やよこにはへたるつくつくし 鹽車
 川舟や手をのべてつむ土筆 冬文
 つくつくし頭巾にたまるひとつより 青江

蘭亭の主人池に鵝を愛せられしは筆意有故也

池に鵝なし假名書習ふ柳陰 素堂
 風の吹方（かぜのふかた）を後のやなぎ哉 野水
 何事もなしと過行（すさまじ）柳哉 越人
 さし柳たゞ直（ただ）なるもおもしろし 一笑

○わがなり一柳自體のそのまゝの姿。
 ○いそがしき一晋書列傳に「稽康字叔夜譙國鉅人也性絶巧而好鍛宅中有二一柳樹甚茂乃激水圍之每夏月居其上以鍛東平呂安服康高致也」

尺ばかりはやたはみぬる柳哉 小春
 すがれく柳は風にとりつかむ 一笑
 とりつきて筏をとむる柳哉 昌碧
 さはれども髪（かみ）のゆがまぬ柳哉 杏雨
 みじかくて垣（かき）にのがる柳哉 此橋
 ふくかぜに牛のわきむく柳哉 杏雨
 吹風に鷹かたよするやなぎ哉 松芳
 かぜふかぬ日はわがなりの柳哉 校遊
 いそがしき野鍛冶をしらぬ柳哉 荷兮
 蝙蝠にみだるゝ月の柳哉 同
 青柳にもたれて通す車哉 素秋
 引いさに後へころぶ柳かな 鷗歩
 菊の名は忘れたれども植（うゑ）にけり 生林

仲春

麥の葉に菜のはなかしる嵐哉
 菜の花や杉菜の土手のあいくに
 なの花の座敷にうつる日影哉
 菜の花の畦うち残すながめ哉
 うごくとも見えで畑うつ麓かな
 萬歳を仕舞ふてうてる春田哉
 つばきまで折そへらるゝさくらかな
 廣庭に一本植しさくら哉
 とさくは蓑干さくら咲にけり
 手のとくほどはちらるゝ櫻哉
 うしろより見られぬ岨の櫻哉
 すぐくと山やくれけむ遅ざくら
 はる風にならくらぶる雲雀哉
 あふのきに寝てみむ野邊の雲雀哉
 高聲につらをあかむる雉子かな
 行かゝり輪繩解てやる雉子哉
 手をついて哥申あぐる蛙かな
 鳴立ていりあひ聞ぬかはづかな
 あかつきをむつかしさに鳴蛙
 いくすべり骨おる岸のかはづ哉
 飛入てしばし水ゆく蛙かな
 不圖とびて後に居なをる蛙哉
 ゆふやみの唐網にいる蛙かな
 はつ蝶を兒の見出す笑ひ哉
 不悔
 長虹
 傘下
 清洞
 去來
 昌碧
 越人
 笑艸
 除風
 一橋
 冬松
 一髮
 野水
 除風
 一雪
 鹽車
 山崎宗鑑
 落梧
 越人
 去來
 落梧
 津島松
 一井
 柳風

○動くとも―其袋(元祿三年刊)には下五「男かな」とあり。

○あふのき―仰向。

○手をついて―古今集の序「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば云々」による作意。

○不圖とびて―原本「不圖と飛」とあり。開は書き誤りなるべし。
 ○唐網―和漢三才圖會に「撒網(たうあみ)字知阿美、今云唐網、江湖池川多用之。今云ふとあみ也。

椶櫚の葉にとまらで過る胡蝶哉 梅
 かやはらの中を出かぬるこてふかな 炊玉
 かれ芝や若葉たづねて行胡蝶 百歳

暮 春

何の氣もつかぬに土手の董哉 忠 知
 ねぶたしと馬には乗らぬ董草 荷 兮
 ほうるくの土とる跡は董かな 野 水
 晝ばかり日のさす洞の董哉 舟 泉
 草刈て董選出す童かな 鷗 歩
 行蝶のとまり残さぬあざみ哉 燭 遊
 麥畑の人見るはるの塘かな 杜 國
 はげ山や龍の月のすみ所大坂式之

○とまり残さぬ一つく
止り行くなり。

○ほろ／＼と山吹の小文に
出づ。大和國西河にての
吟なり。

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音 芭 蕉
 松明にやま吹うすし夜のいろ 野 水
 山吹とてふのまぎれぬあらし哉 卜 枝
 一重かと山吹のぞくゆふべかな 岐阜襟 雪
 とりつきてやまぶきのぞくいはね哉 同 蓬 雨
 あそぶともゆくともしらぬ燕かな 去 來
 去年の巢の土ぬり直す燕かな 俊 似
 いまきたといはぬばかりの燕かな 長 之
 燕の巢を覗行すゞめかな 長 虹
 黄昏にたてだされたる燕哉 鼠 彈
 友減て鳴音かいなや夜の鴈 且 藁
 角落てやすくも見ゆる小鹿哉 蕉 笠
 なら漬に親よぶ浦の鹽干哉 越 人

○たて出され一閉め出さ
れ。

○山まゆー山蠶なり。

○あみ鹽からーあみざこ
(小鰯)の鹽辛なり。

おやも子も同じ飲手や桃の酒 傘 下
 人霞む舟と陸との鹽干かな 三輪友重
 山まゆに花咲かぬる躑躅かな 荷 兮
 臘夜やながくてしろき藤の花 兼 正
 箭火に藤のすゝけぬ鶴舟かな 龜 洞
 永き日や鐘突跡もくれぬ也 卜 枝
 永き日や油しめ木のよはる音 野 水
 行春のあみ鹽からを残りしけり 同

曠野集 卷之三

初夏

ころもがへ^や白きは物に手のつかず 路通

○だぐくさー亂雜なるさま。

○文鱗ー芭蕉門。江戸住、堺の人なり。

○髭にたくー牡丹花肖柏は宗祇の門人にして且つ香を愛したれば、かの名高き宗祇の髭に焚きこめし香もあらんとなり。

○なつ來てもー泊船集に「あら野には一葉を一ツかなとあやまりぬ」と附記せり。

○いたり過ぎたるー柿の若葉は特に光澤つややかなれば、人の粹なるに喩へしならん。いたるとは心の行届きて粹なるをいふ。

更衣襟も^おらずやだぐくさに 傘 下
 ころもがへ刀もさして見たき哉 釋鼠 彈

肖柏老人のもちたまひしあらし山といふ香を、馬のはなむけに文鱗がくれけるとて、雪の朝越人が持きたるを忘れがたく、明るわか葉の比文鱗に申つかはしける

髭に焼^た香もあるべしころもがへ 荷 兮

山路にて

なつ來てもたぐひとつ葉の一つ哉 芭 蕉
 いちはつは^おとこなるらんかさつばた 一 井
 柿の木のいたり過たる若葉哉 越 人
 切かぶのわか葉を見れば櫻哉 岐阜不 交
 若葉からすぐにながめの冬木哉 同 藤 蘿
 わけもなくその木くの若葉哉 龜 洞

○玄寮—玄寮の誤。

○こたへし—雨に耐へて散らざる意。

○深川の庵—芭蕉庵なり。

ひらくとわか葉にとまる故蝶哉 竹洞
 ゆあびして若葉見に行夕かな 鈍可
 はげ山や下行水の澤卯木 夢々
 上ゲ土にいつの種とて麥一穂 玄寮
 枯色は麥ばかり見る夏の哉 生林
 麥かりて桑の木ばかり残りけり 作者不知
 むぎがらにしかるゝ里の葵かな 鈍可
 しら芥子にはかなや蝶の鼠いろ 嵐蘭
 鳥飛であぶなきけしの一重哉 落梧
 けし散て直に實を見る夕哉 岐阜李桃
 大粒な雨にこたえし芥子の花 東巡
 散たびに見ぞ拾ひぬ芥子の花 吉次

深川の庵にて

菴の夜もみじかくなりぬすこしづゝ 嵐雪
 さびしさの色はおぼえずかつこ鳥 野水

仲夏

○元輔—基佐。宗祇時代の連歌師、新撰筑波集にその連歌の入りざりし諷刺の歌を以て名高し。なほこの句「菊の塵」(寶永年間刊)には上五「酔ひもせで」とあり。

○葎室—茅屋といふに同じ。

宵の間は笹にみだるゝ螢かな 櫻井元輔
 刈草の馬屋に光るほたるかな 一髪
 窓くらさ障子をのぼる螢哉 不交
 聞きよりくらさ人呼螢かな 風笛
 道細く追はれぬ澤の螢かな 青江
 あめの夜は下ばかり行螢かな 含帖
 くさかりの袖より出るほたる哉 ト枝
 水汲て濡たる袖のほたるかな 鷗歩

はじめて葎室をとぶらはれける比

○かづける―被れる。

○しるし―明かにそれと知らる。

○柳きはまる―柳の枝の垂れしが汀の水面にとどく意。

こゝらかとのぞくあやめび軒端哉 秋芳
 蚊のむれて梅の一木の曇けり 小春
 かやり火に寐所せまくなりけり 杏雨
 雨のくれ傘のぐるりに鳴蚊かな 二水
 蚊の瘦て鎧のうへにとまりけり 一笑
 藻の花をかづける蟹の鬢かな 胡及
 鹽引て藻の花しほむ暑さかな 兒竹
 足伸べて姫百合艸あらず晝ね哉 此橋
 竹の子に行燈さげてまはりけり 長虹
 箒の時よりしるし弓の竹 去來
 聞おればたゞくでもなき水鶏哉 野水
 五月雨に柳きはまる汀かな 大津一龍
 この比は小粒になりぬ五月雨 尙白

五月雨は傘に音なきを雨間哉 龜洞

岐阜にて

おもしろうさうしさばくる鶉繩哉 貞室

おなじ所にて

おもしろうてやがてかなしき鶉舟哉 芭蕉

おなじく

鶉のつらに籥こぼれて憐也 荷兮

同

聲あらば鮎も鳴らん鶉飼舟 越人

先ふねの親もかまはぬ鶉舟哉 大津淳兒

曲江に籥の見えぬうぶねかな 梅餌

鴨の巢の見えたりあるはかくれたり 路通

松笠の緑を見たる夏野哉 卜枝

○さうしさばくる―この句玉海集追加(寛文七年刊)に「濃州長良河にて十二艘の舟ごとをのゝ十二羽づゝつがひ侍るとみて、おもしろうさうしさばくるう繩かな 貞室」と出づ。數條の鶉繩を巧に操るさまをいへり。
 ○おもしろうて―笈日記に「鶉舟も通り過る程に歸るとて」と前書有り。菊の香(元祿十年刊)に「此句晋子が所持の翁の自筆には」とありて中七を「やがてなかる」とせり。「泣かるゝ」か。

○撫子や―枕草子に「書き
おとりするもの撫子さく
ら山吹」。

虹の根をかくす野中の樗哉 鈍可
蘭の花や泥によごるゝ宵の雨 同
撫子や蒔繪書人をうらむらん 越人
冷じや灯のこる夏のあさ 藤羅
夏の夜やたき火に簾見ゆる里 且藁

菴の留主に

○すびつさへ―枕草子すま
まじきもの條に火起さ
ぬ火桶炭櫃をかぞへ、又
長明の無名抄に「火起さ
ぬ夏の炭びつ心ちして
人もすまめすまじの
身や」の歌あり。
○夕顔や秋はいろ／＼の―
此句千鳥掛には「初秋中
一此處に遊て」此處は尾
の鳴海」と詞書ありて初
秋の吟なり。その他諸集
すべて秋の部に出せり。
なほ此句古今集「みどり
なるひとつ草とぞ春は見
し秋は色／＼の花にぞあ
りける」を踏めるならむ。

すびつさへすごき夏に炭俵 其角
夕がほや秋はいろ／＼の瓢かな 芭蕉
ゆふがほのしほむは人のしらぬ也 野水
夕良は蚊の鳴ほどのくらす哉 借雪
山路来て夕がほみたるのなか哉 津島市
名はへちまゆふがほに似て哀也 長虹

暮夏

○たくむ―工夫す。

○榎もやらぬ―「え退きも
やらぬ」の秀句。玄旨は
細川幽齋なり。

○おもはずの人―思ひかけ
ぬ人。

楠も動くやう也 蟬の聲 昌碧
雲の峰腰かけ所たくむなり 野水
夕立に干傘ぬるゝ垣穂かな 傘下
すゞしさに榎もやらぬ木陰哉 玄旨法師
涼しさよ白雨ながら入日影 去來
簾して涼しや宿のはいりぐち 荷兮
はき庭の砂あつからぬ曇哉 同
おもはずの人に逢けり夕涼み 鳴海如風
飛石の石龍や草の下涼み 津島俊似
涼しさや樓の下ゆく水の音 同
挑燈のどこやらゆかし涼み舟 卜枝
すゞしさをわすれてもどる川邊哉 未學

○蓮みむ日に「蓮見む。日に」とよむべし。

吹ちりて水のうへゆく蓮かな 岐阜秀正
 蓮みむ日にさかやきはわるゝとも 松坂晨風
 笠を着てみなく蓮に暮にけり 古梵
 河骨に水のわれ行ながれ哉 芙水
 はらくとしみづに松の古葉哉 長虹
 すみきりて鹽干の沖の清水哉 俊似
 連あまた待せて結ぶし水哉 文瀾
 引立て馬にのまするし水かな 潦月
 かたびらは淺黄着て行清水哉 尙白
 直垂をぬがずに結ぶしみづかな 一髮
 虫ぼしや幕をふるえばさくら花 卜枝
 麻の露皆こぼれけり馬の路 岐阜李晨
 釣鐘草後に付たる名なるべし 越人

○釣鐘草―奥の細道に「かさねとは八草撫子の名なるべし 曾良」とあると同調。

綿の花たま〜蘭に似たるかな 素堂

曠野集 卷之四

初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風 越人
 梧の葉やひとつかぶらん秋の風 圓解

○雲居の寺―雲居禪師の開きし瑞巖寺。

○一葉散る―大聲天下の秋を知らしむるの情。

松島雲居の寺にて

一葉散音かしましきばかり也 仙化
 かたびらのちむむや秋の夕げしき 津島方生
 男くさき羽織を星の手向哉 杏雨
 朝良は酒盛しらぬさかりかな 芭蕉
 葬や垣ほのまゝのじだらくさ 文鱗

○朝良は―支考の笈日記(元禄八年刊)に「人々、郊外に送り出て三盃を傾待るに」と前書あり。

あさがほの白きは露も見へぬ也 荷 兮

子を守るものにいひし詞の句になりて

○子を守る―土佐日記に舟人の言葉が自ら三十一文字を成せること見えたると同一轍。

○くらふもの―「食はんものを」の意。大鏡に朝顔毒ある故なりとせり。

朝顔をその子にやるなくらふもの	隣なるあさがほ竹にうつしけり	あさがほやひくみの水に残る月	葉より葉にもものいふやうや露の音	秋風やしらすきの弓に弦はらん	涼しさは座敷より釣鱸かな	畦道に乗物すゆるいなばかな	まつむしは通る跡より鳴にけり	さりくす燈臺消て鳴にけり	あの雲は稻妻を待たより哉	いなづまやきのふは東けふは西
同	鷗 歩	胡 及	鼠 彈	去 來	昌 長	鷺 汀	一 髮	素 秋	芭 蕉	其 角

○燈臺―燭臺。

○ひよろくくと―笈日記には中七「こけて露けし」に作る。

ふまれてもなをうつくしや萩の花	ひよろくくと猶露けしや女郎花	棚作はじめさびしき蒲萄哉	草ばうくからぬも荷ふ花野哉	もえさかれて紙燭をなぐる薄哉	行人や堀にはまらんむら薄
舟 泉	芭 蕉	作者不知	伏見任 口	荷 分	胡 及

宗祇法師のこと葉によりて

名もしらぬ小草花咲野菊哉	としくくのふる根に高き薄哉
素 堂	俊 似

仲 秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮	つくくと繪を見る秋の扇哉
芭 蕉	加賀小 春

○かれ朶に―言水の「東日記」(延寶九年刊)に「枯枝に烏のとまりたるや秋の暮」と見ゆ。

谷川や茶袋そしぐ秋のくれ津島益音
 石切の音も聞けり秋の暮傘下
 斧のねや蝙蝠出るあきのくれト枝
 鹿の音に人の貌みる夕部哉一髪
 田と畑を獨りにたのみ案山子哉伊豫一泉
 山賤が鹿驚作りて笑けり重五泉
 紅葉にはたがをしへける酒の間其角
 しらぬ人と物いひて見る紅葉哉東順
 藪の中に紅葉みじかき立枝哉林斧
 どことなく地にはふ葛の哀也越水
 わが宿はどこやら秋の草葉哉宗和
 わが草庵にたづねられし比
 恥もせず我なり秋とおごりけり加賀北枝

○紅葉には白樂天の林間
 煖酒焚紅葉の詩句によ
 る。
 ○間―此字爛に用ふること
 古書には普通なり。

○なり秋―出來秋。

○素堂―山口素堂。葛飾郡
 阿武に隠棲し、池に蓮を
 植ゑて蓮池翁と稱せら
 る。

素堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか越人
 一本の蘆の穂瘦しむせき哉防川
 松の木に吹あてられな秋の蝶舟泉
 ばつとして寐られぬ蚊屋のわかれ哉胡及
 心にもかゝらぬ市のきぬたかな曉鬚
 關の素牛にあひて

○素牛―惟然の初號。

○孫六―關孫六兼元、志津
 三郎兼氏、ともに名高き
 關の刀工なり。

さぞ砧孫六やしき志津屋敷其角
 よしのにて

○きぬた―甲子吟行に「あ
 る坊に一夜をかりて」と
 前書ありて、中七「我に
 きかせよや」と有り。

きぬたうちて我にきかせよ坊がつま芭蕉
 いそがしや野分の空の夜這星加賀一笑

暮 秋

○白菊の散らぬぞ一なごり
なく散るぞめでたしと歌
はれける櫻花に對したる
情。

○かはらけの酒豪ぶりを
見せんとたり。

○鬢帽子—書言字考に「鬢
帽子、又云鉢卷」とあ
り。なほ此句續猿蓑・五
元集等には「朝顔にしを
れし人や」とあり。
○鹽木—鹽やく爲の柴な
り。

俳諧七部集

七八

なにとなく植しが菊の白き哉
しら菊のちらぬぞ少口おしき
山路のきく野菊とも又ちがひけり
一色や作らぬ菊のはなざかり
曉 越 昌 巴
人 碧 丈

荷分が室に旅ねする夜、草臥なをせとて、箔つけたる土器出され
ければ

かはらけの手ぎは見せばや菊の花
菊のつゆ凋る人や鬢帽子
けふになりて菊作ふとおもひけり
かなぐりて蔦さへ霜の鹽木哉
淋しさは櫃の實落るね覺哉
残る葉ものこらずちれや梅もどき
蘆の穂やまねく哀れよりちるあはれ
其 同 二 水
角 路 加 夕
通 生 閣

曠野集 卷之五

初冬

○あめつちの—此句もと
「風聲は天地の語なりと
あるを」と前書あり。

○一夜来て—謠曲三井寺の
中に「わらはをいつもと
ひ慰むる人の候。あはれ
來り候へかし、語らばや
と思ひ候」といふ文句あ
り。

あめつちのはなしとだゆる時雨哉
湖 春

京なる人に申遣しける

一夜きて三井寺うたへ初しぐれ
はつしぐれ何おもひ出すこの夕
湍 尙 白
水

萬句興行に

見しり逢ふ人のやどりの時雨哉
荷 兮

人を待うくる日に

今朝は猶そらばかり見るしぐれ哉
釣がねの下降のこすしぐれかな
落 炊 玉
梧 玉

曠野集 卷之五

七九

○こがらしに―この句により荷兮は「用の荷兮」と名を得たりと（元峯撰、桃の實）。
○みなになり―すべて散り盡したりとなり。

○梨の花―歸り花なり。

渡し守ばかり蓑着るしぐれ哉 傘下
 こがらしに二日の月のふきちるか 荷兮
 一葉づゝ柿の葉みなに成なりにけり 一髪
 このはたく跡は淋しき圍爐裏哉 同
 枇杷の花人のわするゝ木陰かな 同
 茶の花はものゝつつみでに見たる哉 李晨
 梨の花しぐれにぬれて猶淋し 野水
 蓑虫のいつから見るや歸花 昌碧
 麥まきて奇麗なりに成し庵哉 同
 のどけしや麥まく此の衣がへ 一井
 縫ものをたゝみてあたる火燧哉 落梧
 石臼の破おておかしやつはの花 胡及
 青くともとくさは冬の見物哉 文鱗

○葱―葱（シノブ）は夏季なれば、標註には葱の書損じならんといへり。ねぶかと讀むか。又通旨には井の中に生えし冬枯の葱也。句柄によりて冬季に入るゝなるべしと。

○鷹の巾―紙にて製し鷹の頭を包むもの。鳥さへ見ればはやるが故に巾を冠らせてするなり。

あたらしき釣瓶にかゝる葱かな ト枝
 冬枯に風の休みもなき野哉 洞雪
 蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉 一髪
 鷹居すまて石けつまづくかれ野哉 松芳
 こがらしに吹とられけり鷹の巾 杏雨
 鷹狩の路にひきたる燕哉 蕉笠
 寒月
 爐を出て度々月ぞ面白き 野水
 あさ漬の大根あるふ月夜哉 俊似

仲冬

ちろしをく鐘しづかなる霞哉 津島勝吉
 しら浪とつれてたばしる霞哉 津島重治

○せんだん―樗(アブチ)なり。

搔よする馬糞にまじるあられ哉 林
 柴の戸をほどく間にやむ霰哉 杏雨
 いたゞける柴をふるせば霰かな 宗之
 霜の朝せんだんの實のこぼれけり 杜國
 水棚の菜の葉に見たる氷かな 勝吉
 深き池氷のときに覗きけり 俊似
 つきはりてまつ葉かきけり薄氷 除風
 打(折)ちりて何ぞにしたき氷柱哉 夜舟

兼題雪舟

○鹽木―鹽籠に焚く薪。峠まで雪舟にてその薪をとりに行ける景。

峠より雪舟乗(お)をろす鹽木哉 鼠彈
 ぬつくりと雪舟に乗たるにくさ哉 荷兮
 夜をこめて雪舟に乗たるよめ(嫁)り哉 長虹
 馬屋より雪舟引出す朝かな 一井

○はや緒―櫓につけて引く綱。

○忠知―神野氏「白炭や焼かぬ昔の雪の枝」の句名高く、白炭の忠知と稱せらる。

雪舟引や休むも直に立てゐる 龜洞
 つけかへておくる、雪舟のはや緒哉 舍帖
 青海や羽白黒鴨赤がしら 白炭ノ忠知
 舟にたく火に聲たつる衛哉 龜洞
 朝鮮を見たもあるらん友千鳥 村俊
 井を掘る者は六月寒く、米つくおと(男)こは冬裸かなり

○火とぼして―花の咲き初むるを「火をともし」といふ。
○冬籠り―白樂天の間居賦に「間居前復倚此柱」。

汗出して谷に突こむ氷室哉 冬松
 海鼠腸(わた)の壺埋めたき氷室哉 利重
 炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり 龜洞
 膝節をつゝめど出るさむさ哉 鹽車
 火とぼして幾日になりぬ冬椿 加賀一笑
 いつこけし(ひさ)鹿起せば冬つばさ 龜洞
 冬籠りまたよりそはん此はしら 芭蕉

歳暮

餅つきや内にもおら^居ず酒くらひ
 吾書てよめぬもの有り年の暮
 もち花の後はずしけてちりぬべし
 はる近く櫛^{ほだ}つみかゆる菜畑哉
 煤はらひ梅にさげたる瓢かな
 一 野 尚 李
 龜 野 尚 李
 洞 水 白 下
 髮

木曾の月みてくる人の、みやげにとて籽の實ひとつおくらる。年の暮迄うしなはず、かざりにやせむとて

としのくれ籽^{さち}の實一つころくと
 門松をうりて蛤一荷ひ
 田作に鼠追ふよの寒さ哉
 荷 兮
 内 習
 龜 洞

○木曾の月—元祿元年芭蕉越人と共に更科に遊び「木曾の柄浮世の人のみやげ哉」の吟あり。この時柄の實を荷谷に贈りしならん。

○田作—ごまめ。

曠野集 卷之六

雜

年中行事内十二句、

供屠蘇白散

荷 兮

いはけなやとそなめ初る人次第

春日祭

としごとと鳥居の藤のつぼみ哉

石清水臨時祭

沓音もしづかにかざすさくら哉

灌 佛

けふの日やついでに洗ふ佛達

曠野集 卷之六

○いはけなや—古へ正月元日宮中にて薬子とて未婚の童女に供御の屠蘇を管め試みさする事ありき。
 ○春日祭—二月上の申日。
 ○石清水臨時祭—三月中の午日。

○葵付たる―端午の日加茂
參詣の人々皆葵をつくる
なり。

○施米―六月京都の東山西
山北山等の貧僧に官より
米鹽を施すこと。

○乞巧奠―原本「乞巧費」
とあるを改む。

○駒迎―八月中旬信濃甲斐
武藏等より貢進する馬を
馬寮の官人逢坂山に迎
ふ。後世は十六日に一定
し、且つ諸國の駒引は絶
えて信濃の望月のみとな
れり。

○選蟲―殿上人の嵯峨野な
どに逍遙して鳴く虫を捕
り、これを籠に入れて宮
中に上りしをいふ。

○十月更衣―四月一日と十
月一日に宮中にて更衣行
はる。

○五節―十一月中の丑の日
より卯の日に亘りて行は
るゝ公事。

○追儼―つゝな。十二月晦
日朝廷に於て疫鬼を拂ふ
ために行はるゝ儀式。

○詩題―十六句ともみな白
樂天の詩句なり。

○添水―山田などにて猪鹿
を驚かすため、水流には
ね釣瓶やうのものをしか
けて、音を發せしむるも
の。

○またなる―又鳴る。

端午

おも瘦て葵付たる髪薄し

施米

うち明てほどこす米ぞ虫臭き

乞巧奠

わか菜より七夕草ぞ覺へよき

駒迎

爪髪も旅のすがたやこまむかへ

撰蟲

草の葉や足のおれたるきりくす

十月更衣

玉しきの衣かへよとかへり花

五節

舞姫に幾たび指を折にけり

追儼

おはれてや脇にはづるゝ鬼の面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會 春風春水一時來

氷おし添水またなる春の風

白片落梅浮澗水

水鳥のはしに付たる梅白し

春來無伴閑遊少

花賣に留主たのまるゝ隣哉

花下忘歸因美景

寐入なばもの引きせよ花の下

曠野集 卷之六

八七

○春不留—白氏文集には「春不住」に作る。

留春春不留 春歸人寂寞
行春もこゝろへがほの野寺かな

○巖風—文集には「微風吹袂衣」に作る。

巖風吹袂衣 不寒復不熱

○綿脱—綿拔。更衣に布子の綿を抜去りて裕とするをいふ(栗草)。

綿脱は松かぜ聞に行ころか
池晚蓮芳謝

○處有—所有に作るべし。

蓮の香も行水したる氣色哉
暑月貧家何處有 客來唯贈北窓風

○大底—大抵に作るべし。

涼めとて切ぬきにけり北のまど
大底四時心惣苦 就中斷腸是秋天

○それらでは—中々それらの事にてはなし。雪は只寒さのみ云々(通旨)。

雪の旅それらではなし秋の空
夜來風雨後 秋氣颯然新

○風雨後—文集には「秋雨後」とあり。

秋の雨はれて瓜よぶ人もなし

○遅々—長恨歌には「遅々鐘鼓初長夜」とあり。

遅々鐘漏初夜長 歌々星河欲曙天

ひとしきりひだるうなりて夜ぞ長さ

殘影燈闇牆 斜月光穿牖

獨り寐や泣たる貞にまどの月

萬物秋霜能懷色

白菊や素顔で見むを秋の霜

十月江南天氣好 可憐冬景似春美

こがらしもしばし息つく小春哉

寂寞深村夜 殘雁雪中聞

鉢たゝき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經

佛名の禮に腰懷く白髮哉

禪閣の撰びのこし給ひしも、さすがにおかしくて

○殘影云々—文集には「殘燈影閃牆、斜月光穿牖」とあり。

○懷色—懷色の誤。

○似春美—似春華の誤。

○禪閣—一條禪閣兼良をいへり。兼良の撰べる職人歌合の中に洩れたるをここに拾ひて題とせしなり。

鋸鐮目立

かげろふの夕日にいたきつぶり哉

付木突

五月開水鶏ではなし人の家

釣瓶繩打

かへるさや酒のみによる秋の里

糊賣

あさ露のぎぼう折けむつくもがみ

馬糞搔

こがらしの松の葉かきとつれ立て

李夫人

魂在何許 香煙引到焚處

越人

○付木突―付木を削るをいふ。

○ぎぼう―紫萼(ギバウシ)。糊賣婆の蓬髮にぎぼうしを折りてさせるをよみしなり。

○魂在云々―白氏文集卷四に「夫人之魂在何許、香煙引到焚香處」。こゝには香一字を脱せり。

かげろふの抱つけばわがころも哉

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺 花冠不整下堂

はる風に帯ゆるみたる寐貌哉

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳 青黛點眉々細長 外人不見々應笑

もの數寄やむかしの春の儘ならん

西施

宮中拾得娥眉斧 不獻吾君是愛君

花ながら植かへらるゝ牡丹かな

王照君

玉貌風沙(塵) 膝畫圖

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

曠野集 卷之六

○雲髻云々―長恨歌中の句。但し下堂の下に來字を脱せり。

○昭陽人―上陽人。詩句は白氏文集卷三に出づ。

○宮中云々―呂仲見の詩句。

○玉貌云々―僧季潭の詩句。

一日留主をする事侍りて

釣雪

卯

○卯、辰以下皆一日中の時刻を題とせるなり。

寐やの蚊や御佛供焼火に出て行

辰

杜若生ん繪書の來る日哉

巳

講釋の眠りにつかふ扇哉

午

水あびよ藍干上を踏ずとも

未

蟬の音に武家の夕食過にけり

申

五月雨や鶏とまゐるはね作り

○水あびよ―午天に藍を干して其氣もさかんなれば、其上をふまずとも、是にちかづく時は水あびて、長養の氣を破らざる様にあるべきとの禁戒なり(通旨)。

所にありて生をたつ事是非なし。

山 猿

鹿笛の上手を盡すあはれさよ 樹 水

野 鳥

鳴突の行影長き日あし哉 兒 竹

里 虫

枝ながら虫うりに行蜀涑かな 舍 帖

海 魚

おもしろと翮引けり盆の月 同

川 魚

秋の昏鶉川くの火ぶり哉 舍 帖

○火ぶり―松明の光に魚を候ひてとること。

○牛馬云々―以下三句の題詞みな莊子の語なり。

牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是謂人

一方は梅さく桃の繼木かな 越人

○藏舟云々一固の下矣字を脱し、有力を有々力と誤れり。

藏舟於壑藏山於澤謂之固然而夜半有々力者負之而走
からながら師走の市にうるさ（余）い（響）

絶聖棄知大盜乃止

七夕よ物かすこともなきむかし

○鈍者天、鈍者壽一唐子西の古硯銘に「豈非鈍者壽而鈍者天乎」。

鈍者天

散はてゝ跡なきものは花火哉 桂夕

鈍者壽

鶏頭の雪になる迄紅あかきかな 市山

藤房

ほとゝぎす鳴やむ時をしりにけり 一井

○藤房一後醍醐天皇を諫め奉りて隠遁す。事は太平記に詳し。

師直

うつくしく人にみらるゝ荆哉 長虹

○師直一鹽治判官の妻女に心かけし事有名なり。

一休

いろくのかたち（を）あかしや月の雲 湍水

法然

鳴聲のつくろひもなきうづら哉 鼠彈

山岩

おくやまは霰に減るか岩の角 湍水

海岩

苔のりとりし跡には土もなかりけり 同

○苔一古く此一字にて海苔と訓ませたる例多し。

曠野集 卷之七

名所

八重がすみ奥迄見たる龍田哉 杜國

○白魚の―白魚の骨は見たる者なしといふ俚諺により、まだふみも見ぬ大江山の歌に比せしなり。
 ○から崎の―甲子吟行に湖水眺望と前書あり。
 ○阿波手―尾張國あはでの森。

○琵琶橋―名古屋より津島に至る途中にあり。
 ○鬼獄―美濃國。一説に御獄とも。

○藤代御坂―萬葉などに見えたる藤しろのみ坂は紀州なり。こゝは美濃國なれど藤の白きを見て宗祇が生國の歌枕を思ひ出しなり。

○布子賣おし―笈の小文に「布子賣たし」と有り。

しら魚の骨や式部が大江山 荷兮
 から崎の松は花より朧にて 芭蕉
 藁一把かりて花見る阿波手哉 湍水
 嵯峨までは見事あゆみぬ花盛 荷兮
 琵琶橋眺望
 雪残る鬼獄(鬼)さむき彌生かな 含帖
 關こえて爰も藤しろみさか哉 宗祇法師
 美濃國關といふ所の山寺に、藤の咲たるを見て吟じ給ふとや
 芳野出て布子賣(を)おし更衣 杜國
 麥うつや内外もなき志賀のさと 重五
 五月雨にかくれぬものや瀬田の橋 芭蕉
 湖の水まささりけり五月雨 去來
 牛もなし鳥羽のあたりの五月雨 一髮

隅田川にて

○いざのぼれ―末塚の一本草に出で「京にてむつまじかりつる友の武藏の國に」とし經て住けるが角田川見せんとさそひければ「まかりて」と詞書あり。
 ○貝の音―山伏峯入の法螺貝。

九月十三夜

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥 貞室
 みよしのはいかに秋立ち貝の音 破笠
 いざよひもまださらしなの郡哉 芭蕉
 夕月や杖に水なぶる角田川 越人
 唐土に富士あらばけふの月もみよ 素堂
 鳴突の馬やり過す鳥羽田哉 胡及
 鳴突は萱津のあまのむまご哉 淵支
 武藏野やいく所にも見る時雨 舟泉
 湖を屋ねから見せん村しぐれ 尙白
 から崎やとまりあはせて初しぐれ 伊豫隨友
 むさしのとおもへど冬の日あし哉 洗惡

○唐土に―富士は本朝の名山、後の月は寛平法皇の時に取りて我國にてのみ賞する所。
 ○萱津―尾張國海東郡。

○小野—洛北大原の附近。

○星崎—尾張國、笠寺の南。
なほ此句、笈の小文には、「鳴海にとまりて」と前書有り。

○夜の日—夜を日につぐの意か。なほ古版本に「日」を「灯」と朱にて訂正せるものあり。

○雲雀より—甲子吟行に中七「空にやすらふ」とあり。大和多武峯より龍門に越ゆる道、臍峠（今細峠）にての吟なり。

○平尾村—原本平字は草字の如く讀まるれど、平の書誤なるべし。平尾村は多武峯より吉野上市に出づる道の傍にて龍門瀧の南なり。
○花の陰—忠度の「行きくれば木の下かげを宿とせば」の歌と同趣。

○目を出す—芽を出すなり。

○芭蕉—原本芭雀とあり、今改む。

めづらしと生海鼠を焼や小の、奥津島一俊似
冬ざれの獨轆轤やをの、おく湍水笑
雪の富士藁屋一つにかくれけり
よし野山も唯大雪の夕哉
星崎のやみを見よとや鳴千鳥
夜るの日や不破の小家の煤はらひ
如芭野水行

旅

雲雀より上にやすろふ峠かな
大和國平尾村にて
花の陰謠に似たる旅ねかな
櫻咲里を眠りて通りけり
日の入や舟に見て行桃の花
一夕楓
芭蕉

ある人の餞別に

のどけしや湊の晝の生さかな
ひとつ脱で後におひぬ衣がへ
ほととぎすなみだおさへて笑けり
寐いらぬに食焼宿ぞ明やすき
蚊をころすうちに夜明る旅ね哉
五月雨や柱目を出す市の家
夕立にどの大名か一しぼり
芭蕉士を送る
稻妻にはしりつきたる別かな
なきくつて袂にすがる秋の蟬
あき風に申かねたるわかれ哉
物いはじたゞさへ秋のかなしさよ
舟野水泉
除風
冬松
昌碧
松芳
傘下
釣雪
一井
野水
舟泉

霧はれよすがたを松に見へぬ迄 鼠 彈

さらしなに行人々にむかひて

更級の月は二人に見られけり 荷 今

越人旅立けるよし聞て、京より申つかはす

月に行脇差つめよ馬のうへ 野 水

おくられつおくりつはては木曾の秋 芭 蕉

蜘蛛の巢の是も散行秋のいほ 路 通

狩野桶といふ物、其角のはなむけにおくるとて

狩野桶に鹿をなつけよ秋の山 荷 今

とまりく 稻すり歌も替けり 京 ち

入月に今しばし行とまり哉 玄 寮

能きけば親舟に打碇かな 一 井

品川にて人にわかるゝとて

○澤菴の墓―品川東海寺にあり。

澤菴の墓をわかれの秋の暮 文 鱗
草枕犬もしぐるゝか夜るの聲 芭 蕉
旅なれぬ刀うたてや村しぐれ 津 島 常 秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふて

いく落葉それほど袖もほこるびず 荷 今

夢に見し羽織は綿の入にけり 野 水

其角にわかるゝとき

あゝたつたひとりたつたる冬の宿 荷 今

天龍でたゝかれたまへ雪の暮 越 人

から尻の馬にみてゆく千鳥哉 傘 下

里人のわたり候かはしの霜 宗 因

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき 芭 蕉

○あゝたつた―犬子集に「あつたつたひとりたつたることし哉 貞徳」。
○天龍で―西行天龍川の渡しにて船頭に頭をうたれしといふ逸話あり。
○里人の―温庭筠の詩句に「鶯聲茅店月、人跡板橋霜」。宗因の此句顯成撰の境海草(萬治三年刊)に見え「宇治にて」と詞書あり。

○狩野桶―元信未だ四郎次郎といひし頃、貧にして桶に花鳥等を書きて賣れるもの(大鏡)。狩野家の實工の曲物にてつくれる筆洗(標註)。又カリノヲケと訓み、獵師の腰につくる飼箱などいへるもの(通旨)。狩場にて食物を入るる器(よしなし草)等の説あり。他の用例より見るにカリノヲケ説に従ふべきに似たり。たゞしカリノを約めてカノヲケと訓みしか。句は旅の具にこれを贈りしならん。
○ちね―去來の妹。

旅寐して見しや浮世の煤拂 同

述 懷

艸庵を捨て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也 路
子を獨守りて田を打嬾かな 快
餘所の田の蛙入ぬも浮世かな 落
高野にて 梧

散花にたぶさ恥けり奥の院 杜
櫻見て行あたりたる乞食哉 梅
高野にて 舌

父母のしきりに戀し雉子の聲 芭
あやめさす軒さへよそのついで哉 荷
高野にて 蕉

さうふ入湯をもらひけり一盤 同
一本のなすびもあまる住居かな 杏
肩衣は戻子にてゆるせ老の夏 杉
似はしや白髪にかづく麻木賣 龜
九月十日素堂の亭にて 洞

かくれ家やよめ菜の中に残る菊 嵐
かり家を貪るさくくの垣穂かな 曉
人のいほりをたづねて 鮪

さればこそあれたきまゝの霜の宿 芭
舊里の人に云つかはす 蕉

こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉 杜
鎌倉建長寺にまふでし 國
落ばかく身はつぶね共ならばやな 越
曠野集 卷之七 人

○たぶさ云々―有髮の姿を恥づるなり。

○父母の―玉葉集、行基の歌―山鳥のほろくとなく聲きけば父かと思ふ母かと思ふによる。

○人のいほりを―貞享四年三河國伊良古崎なる杜國を訪ねし折の吟。

○傷る小指―曾參の母が、遠遊せる參を思ひて指を嚙みし故事による。

○つぶね―奴僕。

○さより―針魚。

ある人のもとより、見よやとて落葉を一籠おくられて
あはれなる落葉に焼や鳥さより

荷 兮

○たらちめ―親又は母の義。

古郷の事思ひ出る曉に

たらちめの暖甫や冷ん鐘の聲
櫓の火に親子足さす侘ね哉
目や遠う耳やちかよるとしのくれ
ふるさとや臍の緒に泣年の暮
さまの過しをおもふ年のくれ

鼠 彈 去 來 西 武 芭 蕉 除 風

○故郷や―貞享四年十二月郷里に歸りての吟。

老をまたずして鬢先におとろふ

行年や親にしらがをかくしけり

越 人

戀

○一有妻―園女なり。一有は斯波氏、伊勢の人。

春の野に心ある人の素良哉 伊勢一有妻

○妹が垣根―堀川百首に「昔見し妹が垣根はあれにけりつばなまじりの董のみして」。この歌徒然草にも引かれたり。
○六宮云々―白樂天の長恨歌中の句。

六宮粉黛無顔色

宵闇の稻妻消すや月の顔
一めぐり人待かぬるをどりかな

尚 白 長 虹

さびしき折に

つまなしと家主やくれし女郎花
しりながら薄に明るつまどかな
妻の名のあらばけし給へ神送り
松の中時雨、旅のよめり哉

荷 兮 小 春 越 人 俊 似

○知りながら―待つ戀の情。

曠野集 卷之七

○鉢敲き—原本「鉢敲き」とあり。

物おもひ火燧を明あけていかならむ 舟泉
うたゝねに火燧消きえたる別れ哉 嵐蓑
山畑にも思はゞや蕪引 松芳
きぬくを霰見よとて戻りけり 冬松
おそろしやきぬくの比鉢敲たき 昌碧

無常

末期に

○散る花を—此句其角の雜談集にもいへる如く實は辭世に非ずしてたゞ觀想の吟なり。守武の辭世は別に「朝顔にけふは見ゆらん我世かな」の句あり。

散る花を南無阿彌陀佛と夕哉 守武
無常迅速
咲つ散つひまなきけしの畠哉 傘下
末期に
南無や空たゞ有明のほとゝぎす 塚元順

○妹—去來の妹千代子（俳號千子）、長崎の御船手清水藤右衛門に嫁す。元祿元年五月十五日歿。辭世の句に「もえやすく又消えやすく螢哉」。

松坂の浮瓢といふ人の身まかりたるにいひやりける
橘たちのかほり顔見ぬばかり也 荷兮
いもうとの追善に

○コ齋—江戸の人、元祿元年七月廿一日歿す。なほ此句作者名なきも作者はコ齋なる事、又正しくは中七「一つの」たるべき事、白雪の誹諧曾我等に見ゆ。

手のうへにかなしく消る螢かな 京去來
ある人子うしなはれける時申遣す
あだ花の小瓜とみゆるちぎりかな 荷兮
世をはやく妻の身まかりける比
水無月の桐の一葉と思ふべし 野水

辭世

あはれ也燈籠一つに主まコ齋ま
子こにをくれける比

似た顔のあらば出てみん一躍り 落梧
一原野にて

をく露(露)や小町がほねの見事さよ 釣雪

妻の追善に

をみなへししでの里人それたのむ 自悦

李下が妻のみまかりしをいたみて

ねられずやかたへひえゆく北おろし 去來

コ齊身(齊身)まかりし後

その人の麩(麩)さへなし秋のくれ 其角

母におくれける子の哀れを

あ(を)さな子やひとり食(食)くふ秋の暮 尙白

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの烹(にゆ)る音 芭蕉

旅にてみまかりける人を

あは雪のとどかぬうち(きえ)に消にけり 鼠彈

鳥邊野(の)かたや念佛の冬の月 加賀小春

曠野集 卷之八

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像 芭蕉

負てくる母おろしけりねはんぞう 鼠彈

西行上人五百歳忌に

はつきりと有明残る櫻かな 荷兮

おなじ遠忌に

連翹や其望日としほ(を)れけり 胡及

うで首に蜂の巢かくる二王哉 松芳

曠野集 卷之八

○ある人の追善に―笈日記には「少年を失へる人の心を思ひやりて」とあり。

○李下―江戸の人、芭蕉門。

○神垣や―金葉集、西行の歌「神垣のあたりと思へどゆふだすき思ひもかけぬかねの音哉。」

○西行上人五百歳忌―元祿二年なり。

○その望の日―西行の「願はくは」の歌による。

○木履はく―笈の小文に初瀬にての句として「足駄はく僧も見えたり花の雨」と有り。

○花に酒―五元集に「日輪寺の僧と連歌のかたはらに對興して」と詞書あり。

○序品の心―法華經序品に「天雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華曼珠沙華摩訶曼珠沙華、散佛上及諸大衆」。

○龍女成佛―法華經提婆達多品に出づ。

○蛇の玉―涙を龍女の寶珠に比す。標註にへびの玉は草の名と註したれど、未詳。

木履はく僧も有けり雨の花
つりがねを扇で鼓く花の寺
花に酒僧とも侘ん鹽さかな
其角

貞享つちのへ辰の歳、彌生一日東照宮の別當、僧正の御房に、慈惠大師遷座執事法華八講の侍るよし、尊き事なれば聽聞にまかりて、序品のころを

散花の間はむかしばなし哉
越人

女房の聽聞所と覺て、御簾たれおく暗き所あり、龍女成佛の所に至りて、しのびあへず鼻かむ聲のしければ

ほろくと落るなみだやへびの玉
觀音の尾上のさくら咲にけり
古寺やつるさぬかねの葦草
一井

八島にて

○海士の家―謠曲八島「何旅人は都の人と申すか、さらば御宿をかし申さん。しかも今宵はてりもせずくもりも果ぬ春の夜の」。

○ふべん―不辨。貧乏なるをいふ。

○江湖部屋―江湖僧（曹洞宗にて學問僧をいふ）の一夏修行をなす所。

○奈良にて―笈の小文に、「灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産を見て此日におみておかしければ」と詞書あり。

海士の家聖よびこむやよひ哉
咲にけりふべんな寺の紅牡丹
夏山や木蔭くの江湖部屋
蕉葉

奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉
灌佛の其比清ししらがさね
尙白

高野にて

腰のあふぎ禮義ばかりの御山哉
齋に來て菴一日の清水哉
加賀一笑

十如是

おもふ事ながれて通るしみづ哉
荷兮
即身即佛

夏陰の晝寐はほんの佛哉
愚益
曠野集 卷之八

○折かけ―細く削りたる竹二本を四つ手の如く方形の板にさしこみて紙を張りし手輕なる燈籠なり。
○石籠―蛇籠なり。

ほころびや僧の縫ぬいちる夏衣 鼠彈
おどろくや門もてありく施餓鬼棚 荷兮
折かけの火をとるむしのかなしさよ 探丸
石籠に施餓鬼の棚のくづれ哉 文里
魂祭舟より酒を手た向むけり 龜洞
たままつり道ふみあくる野菊哉 卜枝
攝待のはしら見たてん松の陰 釣雪

平等施一切

攝待にたゞ行人をとゞめけり 俊似
稻妻に大佛おがむ野中哉 荷兮
垣越に引導ひくばせを哉 卜枝

○鶉、不圖―原本、鶉、不圖とあり、今改む。

ある人四時の景物なりとて、水鶉と鶉とを不食、不圖其心を感じて、我も鶉をくらはず

鴈くはぬ心佛にならばぬぞ 荷兮
ある寺の興行に

○かへりうて―謡曲難波に「今の太鼓は波なればよりてはうちかへりては打つ」(撮解)。かへりの語に秋季をもたせり。
○鉢の子―托鉢する鉢。

燕も御寺の鼓かへりうて 其角
進み出て坊主おかしや月の舟 一井
鉢の子に木綿をうくる法師哉 卜枝
人のもとにありて、たち出むとしけるに、またしぐれければ
衣着て又はなしけり一時雨 鼠彈

鎌倉の安國論寺にて

たうふとさの涙や直に氷るらん 越人
古寺の雪

曙や伽藍くの雪見廻ひ 荷兮
同

雪折やかゝる二玉の片腕 俊似
曠野集 卷之八 一一三

つくり置てこはされもせじ雪佛だき 一文潤井
朝寐する人のさはりや鉢鼓 其角

千觀が馬もかぜはし年のくれ

藥王品七句

まつ白にむめの咲たつみなみ哉 胡及

如寒者得火

雪の日や酒樽拾ふあまの家

如裸者得衣

双六のあひてよびこむついで哉

如商人得主

竹たてゝをけば取つくさげかな

如子得母

如渡得船

○千觀—千觀法師、攝津金龍寺に住み、往來の旅人のため自ら馬夫となりしといふ(扶桑隱逸傳)。五元集には「大津驛」と前置して「千觀の馬もせはしやとしの暮」とあり。○かぜはし—原本「かせかし」とも讀まる。然らば貸せかしの意ならん。○藥王品—法華經にあり。

○ついでり—微雨。

○さげ—大角豆。

月の比隣の榎木きりにけり

如病得醫

かはくとき清水見付る山邊哉

如暗得燈

秋のよやおびゆるときに起さるゝ

神祇

古宮や雪しるかゝる獅子頭 釣雪

二月廿五日奉納に

きさらぎや廿四日の月の梅 荷分

しんくと梅散かゝる庭火哉 同

鶯も水あびてこよ神の梅 龜洞

上下のさはらぬやうに神の梅 昌碧

○雪しる—雪汁。雪解水をいふ。
○奉納—尾張櫻天満宮の奉納句(通旨)。

○覺えなく―知らず識らず。

灯のかすかなりけり梅の中
 何とやらおがめば寒し梅の花
 覺えなくあたまぞさがる神の梅
 月代もしみるほど也梅の露
 門あかで梅の瑞籬おがみけり
 繪馬見る人の後のさくら哉
 花に来て齒朶かざり見る社哉
 宮の後川渡り見るさくら哉
 御手洗の木の葉の中の蛙哉
 ほとゝぎす神樂の中を通りけり
 宮守の灯をわくる火串かな
 破扇一度にながす御祓かな
 川原迄瘧まぎれに御祓哉

釣雪
 越人
 舟泉
 雨桐
 重五
 玄察
 鈍可
 李桃
 好葉
 玄察
 龜洞
 未學
 荷兮

○火串―ほぐし。夏山の歌を狩るに、闇夜小炬を串につけて地にさすをいふ。

○きししらぬ―高砂の謠に「久しき代々の神かくら夜のつゝみの」と有り。

○葛城の神―言主神、かたち醜きを取ぢて畫はかくれ夜のみ働きしといふ神なり。されば庭火も明るすぎては困るならんとの作意。

○肩衝―茶入。

こがらしや里の子覗く神輿部屋
 此月の恵比須はこちにゐます哉
 冬ざれや禰宜のさげたる油筒

尚白
 松芳
 落梧

若宮奉納

きししらぬ哥も妙也神々樂
 跡の方と寐なをす夜の神樂哉
 鈴鹿川夜明の旅の神樂哉
 かづらきの神にはふとき庭火哉
 橋杭や御祓かゝる煤はらひ

利重
 野水
 昌碧
 村俊
 卜枝

祝

肩付はいくよになりぬ長閑也 冬文

荷兮が四十の春に

幾春も竹其儘に見ゆる哉 重五
 君が代やみがくことなき玉つばき 越人
 青苔は何ほどもとれ沖の石 傘下
 いきみたま壘の上に杖つかん 龜洞
 千代の秋にほひにしるしことし米 同
 しばしかくれるける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り 芭蕉

○いきみたまー一三〇頁頭註参照。

○先祝へー此句巴靜の刷毛序(寶永三年刊)に出で、「權七にしめす」と題せる一文につゞけり。權七は荷谷の忠僕なり。

曠野集員外

誰か華をおもはざらむ。たれか市中にありて朝のけしきを見む。
 我東四明の麓に有て、花のこゝろはこれを心とす。よつて佐川田喜六の、よしの山あさな〜といへる哥を、實にかんず。又

麥喰し鴈と思へどわかれ哉

此句尾陽の野水子の作とて、芭蕉翁の傳へしをなをざりに聞しに、さいつ比、田野へ居をうつして、實に此句之感ず。むかしあまた有ける人の中に、虎の物語せしに、とらに追はれたる人ありて、獨色を變じたるよし、誠のおほふべからざる事左のごとし。猿を聞て實に下る三聲のなみだといへるも、實の字、老杜のこゝろなるをや。猶鴈の句をしたひて

麥をわすれ華におぼれぬ鴈ならし 素堂

○東四明ー東叡山をいへり。

○佐川田喜六ー永井直勝の臣、名は昌俊、和歌を善くし、吉野山花まつころの朝な〜心にかゝる津の白雲の吟、後陽成天皇の御感を蒙れりといふ(續近世時人傳)。

○田野へー葛飾。

○虎の物語ーこの話小學致知類に出づと(大鏡)。

○猿を聞てー杜甫の秋興の詩句に「聽猿實下三聲淚」。

○步鶴—步行して鶴をつかふこと。

○不破の萬作—關白秀次の小姓にて、美少年の名高かりき。秀次自刃の時高野山にて殉死す。時年十八。

○かへとり—浚渫。

○しめさす—蝸とる場所を圍ひ定むるなり。一説、蝸とる人の浪間に點々たるを、標木を立てし如しと見立てしなり。
○舟間—舟の入荷のとだえし間をいふ。

露しぐれ歩^か鶴^ちに出る暮かけて
うれしとしのぶ不破の萬作
かしこまる諫に涙こぼすらし
火箸のはねて手のあつき也
かくすもの見せよと人の立^{たち}かゝり
水せきとめて池のかへとり
花ざかり都もいまだ定らず
捨^{すて}て春ふる奉加帳なり
墨ぞめは正月ごとくにわすれつゝ
大根さざみて干^{ます}にいそがし
遠淺や浪にしめさす^あ蝸^ぎとり
はるの舟^{ふな}間^まに酒のなき里
龜洞
荷兮
兮 永 人 兮 水 人 兮 水 人 兮

○筆—執筆^{シツシ}(俳諧の席上にて句を懷紙に記す役)の略。

○一駄—一頭の馬につくる荷。

○宜禰—きね。禰宜。
○麻—ぬさと訓むべきか。幣帛なり。

○年榮—としばへの宛字。年ばい。

○めつたに—むやみに。
○湯殿—出羽の湯殿山。

○たらかされ—たまされ。

のどけしや早き泊に荷を解て
百足の懼^{おそ}る薬たきけり
夕月の雲の白さをうち詠^{なげ}
夜寒の蓑を裾に引^ひさせ
萩の聲どこともしらぬ所ぞや
一駄過して是も古綿
道の邊に立暮したる宜禰が麻
樂する比とおもふ年榮
いくつともなくてめつたに藏造
湯殿ま^あい^りの^もめ^むた^つ也
涼しやと薙もてくる川の端
たらかされしや^たる^す月
秋風に女車の髭^あと^こ
龜洞
昌 野 舟 釣 昌 荷 龜
碧 水 泉 雪 碧 兮 洞
兮 泉 雪 碧 兮 洞

○法輪—法輪寺。

○八重山吹—花おそし。女の年頃すぎし事に應ず。

○むく起—起きるとすぐ。

○高田派—伊勢一身田専修寺を本山とする眞宗の一派。

○小湊—日蓮上人誕生の地。

○桶のかづら—桶の箍(マガ)。

○田作りに—ごまめにて精進落ちをするとなり。

俳諧七部集

一三四

袖ぞ露けき嵯峨の法輪
 時くにもものさへくはぬ花の春
 八重山吹ははたちなるべし
 日のいでやけふは何せん暖に
 心やすげに土もらふなり
 向まで突やるほどの小ぶねにて
 垢離かく人の着ものの番
 配所にて干魚の加減覺えつゝ
 哥うたふたる聲のほそく
 むく起に物いひつけて亦睡り
 門を過行茄子よびこむ
 いりこみて足輕町の藪深し
 おもひ逢たりどれも高田派

釣雪 昌碧 野水 舟泉 龜洞 荷分 野水 舟泉 釣雪

盃もわするばかりの下戸の月
 やゝはつ秋のやみあがりなる
 つばくらもちほかた歸る寮の窓
 水しほはゆき安房の小湊
 夏の日や見る間に泥の照付て
 桶のかづらを入しまひけり
 人なみに脇差さして花に行
 ついたつくりに落る精進

昌碧 野水 舟泉 龜洞 荷分 野水 舟泉 釣雪

美しきさざなみ鱧うきけり春の水
 柳のうらのかまさりの卵たまご
 夕霞染物とりてかへるらん
 けぶたさやうに見ゆる月影

舟泉 松芳 冬文 荷分

曠野集員外

一二五

○駒の宿—信濃望月の駒迎は八月十六日、甲斐の駒迎は同十七日(公事根源)

○生身魂—陰曆七月八日より十三日迄の吉日をえらび、存生の二親に供養し長壽をいのること。

○縦—原本「稜」とあり。

○きつき—強き。

夕せはしき酒ついでやる
 駒のやど昨日は信濃けふは甲斐
 秋のあらしに昔淨瑠璃
 めでたくもよばれにけらし生身魂
 八日の月のすきといるまで
 山の端に松と縦とのかすかなる
 きつきたばこにくらくとする
 暑き日や腹かけばかり引結び
 太鼓たゝきに階子のぼるか
 ころくゝと寐たる木賃の艸枕
 氣だてのよきと聳にほしがる
 忍ぶともしらぬ顔にて一二年
 庇をつけて住居かはりぬ

兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮

○數むつかし—數多きがわづらはし。

○段々—段々に花が咲くとなり。

三方の數むつかしと火にくぶる
 供奉の艸鞋を谷へはきこみ
 段々—や小鹽大原嵯峨の花
 人おひに行はるの川岸

筆 同 水 同

月さしのぼる氣色は、晝の暑さもなくなるおもしろさに、柄をさしたらばよき團と、宗鑑法師の句をすむじ出すに、夏の夜の疵といふ、なを其跡もやますつゞきぬ。

○月に柄を—萬葉の「久方の天ゆく月を網にさし我大君はきぬがさにせり」をふまへたり。
○蚊の—其角の句「夏の月蚊を疵にして五百兩(温故集)と同工。

月に柄をさしたらばよき團哉
 蚊のおるばかり夏の夜の疵
 とつくりを誰が置かへてころぶらん
 おもひがけなきかぜふきのそら
 眞木柱つかへおさへてよりかゝり

傘 越 人 下 人 同

使の者に返事またする
 あれこれと猫の子を選るさまに
 としたくするまであはう也けり
 どこでやら手の筋見せて物思ひ
 まみおもたげに泣はらすかほ
 大勢の人に法華をこなされて
 月の夕に釣瓶繩うつ
 喰ふ柿も又くふかきも皆澁し
 秋のけしきの畑みる客
 わがまゝにいつか此世を背くべき
 寐ながら書か文字のゆがむ戸
 花の賀にこらへかねたる涙落つ
 着ものゝ糊のこはき春かぜ

同筆下同人同下同人同下同人

○こなされー悪口を云はれ
 へこまされる。
 ○繩うつーより合せる。

○花の賀ー正月より六月ま
 てに生れたるは花の賀、
 七月より十二月までに生
 れたるは紅葉の賀を祝ふ
 (大鏡)。

○獨鉈鎌首ー六百番歌合の
 時顯昭は手に獨鉈を持
 ち、寂蓮は鎌首をもたげ
 て相争へり(井蛙抄)。

○請ー詩人、保證人。
 ○苺ー詩幽風に「七月食瓜、
 八月斷壺、九月叔苺」。毛
 傳に苺、麻子(アサノミ)も
 也といへり。但しこゝに
 ては「あさ」とのみ訓む
 外なかるべし。或はつと
 とよみ、或は苺の誤とな
 し、諸説多けれども従ふ
 べからず。

うち群て浦の筥屋の鹽干見よ
 内へはいりてなをほゆる犬
 酔ざめの水の飲たき比なれや
 たゞしづかなる雨の降出し
 歌あはせ獨古鎌首まいらるゝ
 また獻立のみなちがひけり
 灯臺の油こぼして押かくし
 白をおこせばさきりす飛
 ふく風にゑのころぐさのふらくと
 半はこはす筑やまの秋
 むつくと月みる顔の親に似て
 人の請にはたつこともなし
 にぎはしく瓜や苺やを荷ひ込

同人同下同人同下同人同下同人

○静御前に鶴岡八幡にて舞ひしこと吾妻鏡に見ゆ。

○かげの病一體分身して形と影との如くなる病。前句の静より謡曲の二人静に因みたる作意なるべし。

○煩「なやみ」とも「やまひ」とも訓むべし。なほ越人自筆の此卷には「煩」の「の」字なく、ワヅラヒとよむものゝ如し。

○酒熟き越人自筆に、酒熟きと傍訓有り。

○そめいろ梵語蘇迷廬の訛。須彌山、妙高山。句は富士を之に比せしなり。

○うれしさ袖さきはきの誤か。新勅撰「嬉しさの昔は袖に包みけりこよひは身にも餘りぬる哉」。

○西王母、東方朔共に長壽の人。

○衣の妻衣の端。

○穴一池に小孔を穿ち錢をなげ入るゝ小兒の遊戯。

○伊勢の田舎には八朔に雛を飾る風習の所もあるなり。

○不斷櫻伊勢の白子観音寺の名木。

○念者義兄弟の兄分の者をいふ。

○弓窓のさへへの竹を云ふ。

静御前に舞をすゝむる

空蟬の離魂の煩のおそろしき

あとなかりける金二萬兩

いとをしき子を他人とも名付けたり

やけどなをして見しつらきかな

酒熟き耳につきたるさゝめごと

魚をもつらぬ月の江の舟

そめいろの富士は淺黄に秋のくれ

花とさしたる草の一瓶

饅頭をうれしさ袖に包みける

うき世につけて死ぬ人は損

西王母東方朔も目には見えず

よしや鸚鵡の舌のみじかさ

あぢきなや戸にはさまるゝ衣の妻

戀の親とも逢ふ夜たのまん

やゝおもひ寐もしねられずうち臥て

米つく音は師走なりけり

夕鶉宿の長さに腹のたつ

いくつの笠を荷ふ強力

穴いちに塵うちはらひ草枕

ひいなかざりて伊勢の八朔

満月に不斷櫻を詠めばや

念者法師は秋のあきかぜ

夕まぐれまたうらめしき紙子夜着

弓すゝびたる突あげのまど

道ばたに乞食の鎮守垣ゆひて

角 同 人 角 角 同 人 同 角 同 人 同 角

同 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人 同

○あきつき臙—胡葱臙。胡葱を青く茹で浅刺等と酢味増和へにす。
○よびつぎの濱—尾張國愛知郡。

ものきゝわかぬ馬士の闇とり
花の香にあきつき臙みどり也
むしろ敷べき喚續の春
同人

○外面—何丸・西馬はソトモと訓み家の後なりといへり。

我もらじ新酒は人の醒やすき
秋うそ寒しいつも湯嫌
月の宿書を引ちらす中にねて
外面薬の草わけに行
はねあひて牧にまじらぬ馬
同人

○ほそりやる—當時の唄にほそりといふがあり。その唄をうたふ細やかなる聲のさまなるべし。
○はなれ—の—古き小唄に「はなれ」のあつた雲見ればあすの別れもあつた如し。

川越くれば城下のみち
疱瘡貌の透とをるほど齒のしろき
唱哥はしらず聲ほそりやる
なみだみるはなれ—のうき雲に
後ぞひよべといふがほりなき
今朝よりも油あげする玉だすき
行燈はりてかへる浪人
着物を礎にうてと一つ脱
明日は髪そる宵の月影
しら露の群て泣ゐる女客
つれなの醫者の後姿や
ちる花に日はくるれども長咄
よぶこ鳥とは何をいふらん
同人

○此巻につき越人の「猪の早太」に「先にあら野撰集の時、嵐雪、越人兩吟の歌仙後の一折、翁の心に應ぜざるところありと削捨て、たゞ一折をあらはし給へり云々」とあれば芭蕉の意志にて以下掲げざりしにや。

初雪やことしのびたる桐の木に
野水
日のみじかきと冬の朝起
落梧
山川や鶉の喰ものをさがすらん
同人

賤を遠から見るべかりけり

おもふさま押合月に草臥つ

あらことくし長櫃の萩

川越の歩にさしれ行穰の雨

ねぶと痛がる顔のきたなき

わがせこをわりなくかくす縁の下

すがしき習ふ比のうさこひ

更る夜の湯はむつかしと水飲て

こそぐり起す相住の僧

峰の松あぢなあたりを見出たり

旅するうちの心寄麗さ

烹た玉子なまのたまごも一文に

下戸は皆いく月のおぼるげ

野落

水同梧水梧水梧水梧水梧水梧

○長櫃の萩—橋爲仲陸奥守の任はて、歸る時宮城野の萩を長櫃十二合に入れて都に上る。京に入る日貴賤群衆して見物し、御幸潜びて成りけりと(無名抄)。
○歩—夫役。さゝるゝは指命さるゝなり。
○すがしき—歌無くて手のみの箏曲。

○あぢな—奇妙な。

○いく—行く。

耳や齒やようても花の數ならず

具足めさせにけふの初午

いつやらも鶯聞ぬ此おくに

山伏住て人しかるなり

くはらくとくさびぬけたる米車

挑灯過て跡聞さくれ

何事を泣けむ髪を振おほひ

しかく物もいはぬつれなき

はつかしといやがる馬にかきのせて

かゝる府中を飴ねぶり行

雨やみて雲のちぎるゝ面白や

柳ちるかたと例の菴道

軒ながく月こそさはれ五十間

水梧水梧水梧水梧水梧水梧

○しかく—葵心録に大和物語の故事を引きて解けり。醍醐天皇、或御曹司にて公忠をして清げなる女の髪ふりおほひて泣くを問はせ給ふに女答へもせず。公忠「思ふらん心の中は知らねども泣くをみるこそ悲しかりけれ」とよみしと。
○菴道—貴人の通る際道に筵を布くをいふ。枕草子、大進生昌の第に中宮行啓の條などにも見えたり。
○月こそさはれ—枕草子の前條、生昌の第の門小さく車さはりて入らずとあるを打掠めたり。

ひ

そ

と

膳所

○水漿を—莊子逍遙遊に
「惠子謂_レ莊子_レ曰、魏王
胎_レ我大瓠之種、我樹_レ之
而實_レ五石、以盛_レ水漿、其
堅_レ不_レ能_レ自擧、(中略)吾
爲_レ其無用_レ而捨_レ之、莊子
曰、夫子固拙_レ於用_レ大、今
子有_レ五石之瓠、何不_レ慮_レ
以爲_レ大樽_レ而浮_レ乎江
湖_と」

○乾坤の外—元稹の詩句に
「壺中天地乾坤外」

江南の珍碩我にひさごを送り。これは是水漿をもち酒をたしな
む器にもあらず、或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべ
にも異なり。吾また後の惠子にして用ることをしらず。つらく
そのほとりに睡り、あやまりて此うちに陥る。醒てみるに、日月
陽秋きらゝかにして、雪のあけぼの闇の郭公もかけたることなく、
(ほ)なを吾知人ども見えたきりて、皆風雅の藻思をいへり。しらす是
はいづれのところにして、乾坤の外なることを、出てそのことを
云て、毎日此内にをどり入。

元祿三六月

越智越人

○庄野―伊勢、龜山の附近。東海道、参宮道の要路。

○和日―古俳書にノドカ、(鷹筑波「日影指棒の邊は和日にてし」、又ウラ、カ(春庭樂「質物語癒す和日」等とよめり。こゝはノドカと訓むべし。)
○越―越人。

鮪釣のちいさく見ゆる川の端
念佛申ておがむみづがき
こしらえし薬もうれず年の暮
庄野、里の犬におどされ
旅姿稚き人の姫つれて
花はあかいよ月は朧夜
しほのさす縁の下迄和日なり
生綱あがる浦の春哉
此村の廣きに醫者のなかりけり
そろばんをけばものしりといふ
かはらざる世を退屈もせず
また泣出す酒のさめぎは
ながめやる秋の夕ぞだゞびるさ

荷

通 同 碩 同 通 同 碩 同 越 人 兮

○文珠―文珠は釋迦の弟子中智慧第一。槃特は最も愚痴なりしがなほよく悟道に入れり。
○ひしほ味憎―なめ味憎。

○かゝへ―香を含みもつをいふ。枕草子に「汗の香すこしかゝへたるきぬの薄きをひきかづきて」。

蕎麥眞白に山の洞中
うどんうつ里のはづれの月の影
すもゝもつ子のみな裸むし
めづらしやまゆ烹也と立とまり
文珠の智慧も槃特が愚痴
なれ加減又とは出来ひしほ味憎
何ともせぬに落る釣棚
しのぶ夜のおかしうなりて笑出
逢ふより顔を見ぬ別して
汗の香をかゝえて衣をとり残し
しきりに雨はうちあけてふる
花ざかり又百人の膳立に
春は旅ともおもはざる旅

人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 同 人 同 兮 同 兮 同

珍碩九
翁一
路通八
荷兮十
越人八

城下

○鐵炮の—鐵炮の稽古は四月より初む。

鐵炮の遠音に曇る卯月哉 野徑

○ますほの小貝—ますほはまそほに同じく赤色の小貝をいふ。

○なまぬる—微温湯。

○物もうの聲—案内を乞ふ聲。

砂の小麥の瘦てはら〜 里東
西風にますほの小貝拾はせて 泥土
なまぬる一つ 餵ひかねたり 乙州
碁いさかひ二人しらける有明に 怒誰
秋の夜番の物もうの聲 珍碩

○おそはれ—驚はれ。原本「おれはれ」とあり、おはそ。の誤なるべし。

○川原咄し—四條川原の芝居の取沙汰なり。

○丁百—九六錢（錢九十六文を百文に通用せしむるをいふ）に對して錢百文を百文とすること。

女郎花心細氣におそはれて 筆
目の中おもく見遣がちなる 野徑
けふも又川原咄しをよく覺へ 里東
顔のおかしき生つき也 泥土
馬に召神主殿をうらやみて 乙州
一里こぞり山の下 荊 怒誰
見知られて岩屋に足も留られず 泥土
それ世は泪雨としぐれと 里東
雪舟に乘越の遊女の寒さうに 野徑
壹歩につなぐ丁百の錢 乙州
月花に庄屋をよつて高ぶらせ 珍碩
煮しめの鹽のからき早蕨 怒誰
くる春に付ても都わすられず 里東
ひさご集

半氣違の坊主泣出す
 のみに行居酒の荒の一驟
 古きばくちののこる鎌倉
 時くは百姓までも烏帽子にて
 配所を見廻ふ供御の蛤
 たそがれは船幽靈の泣やらん
 連も力も皆座頭なり
 から風の大岡寺繩手吹透し
 蟲のこはるに用叶へたき
 糊剛こはき夜着にちいさいぎ御座敷て
 夕邊の月に菜食めし嗅か出す
 看經の嗽せきにまざるゝ咳がい氣聲
 四十は老のうつくしき際

珍 乙 野 里 珍 泥 乙 野 里 珍 泥 乙 野 里 珍
 碩 州 徑 東 碩 土 州 徑 東 碩 土 州 徑 東 碩

○大阿寺繩手—龜山と關との間十八丁の暖なり。
 ○蟲のこはる—腹の痛むなり。
 ○ちいさぎ—ぎはきの誤。
 ○御座—莫座なり。
 ○咳氣聲—風邪聲。

○細め—細目。
 ○杉村—杉のむら立。

髪くせに枕の跡を寐直して
 酔を細めにあけて吹ふるゝ
 杉村の花は若葉に雨氣づき
 田の片隅に苗のとりさし

乙 野 怒 泥
 州 徑 誰 土

野徑六
 里東六
 泥土六
 乙州六
 怒誰六
 珍碩五
 筆一

○雜—發句雜の句の時は第三にて當季を定む。

○龜の甲—大鏡に「老龜烹
不_レ爛移_二禍於古桑_一」とい
ふ古詩の故事を説けり。
○牛糞—根本律の二驚一體
の故事を以て迎へたるな
り。
○からうす—碓。

○風呂—茶の湯の風爐か。

○かますご—いかなごに同
じ。
○卷櫛—繩にて巻きたる
櫛。

龜の甲烹らるゝ時は鳴もせず
唯牛糞に風のふく音
百姓の木綿仕まへば冬のきて
小哥そろゆるからうすの繩
獨寐て奥の間ひろき旅の月
蟻螂落てきゆる行燈
秋萩の御前にちかき坊主衆
風呂の加減のしづか成けり
鶯の寒き聲にて鳴出し
雪のやうなるかますごの塵
初花に雛の卷櫛居ならべ
心のそこに戀ぞありける
御簾の香に吹そこなひし笛の役

乙 州
珍 碩
里 東
探 志
昌 房
正 秀
及 肩
野 徑
二 嘯
乙 州
珍 碩
里 東
探 志

○鳥羽—山城乙訓郡。

○ぢいめき—俳諧初學抄・
毛吹草等に秋の詞とせ
り。小鳥などの鳴きさわ
ぐをいふ。落穂集(寛文
三年)つがひるてぢいめ
くや姥鳴の聲 家定「炭
俵」ぢいめきの中でより
出するりほあか 孤屋」
○霜折れ—天氣の曇りて寒
きこと。又空曇りて霜の
降らぬ事なりと。

○鉢いひならふ—托鉢して
食を乞ふ聲を出しならふ
なり。
○傳馬—原本轉馬に作る。
今改む。
○廻り口—受持のところ。
○いきりたる—勢ひ立つた
る。
○鯉棚—鯉店なり。

寐ごとにて起て聞ば鳥啼
錢入の巾着下て月に行
まだ上京も見ゆるやゝさむ
蓋に盛鳥羽の町屋の今年米
雀を荷ふ籠のぢいめき
うす曇る日はどんみりと霜おれて
鉢いひならふ聲の出かぬる
染て憂木綿裕のねずみ色
撰あまされて寒さあけほの
暗がりに薬罐の下をもやし付
傳馬を呼る我まわり口
いきりたる鑓一筋に挾箱
水汲かゆる鯉棚の秋

昌 房
正 秀
及 肩
野 徑
二 嘯
乙 州
珍 碩
里 東
探 志
昌 房
正 秀
及 肩
野 徑

○虫は皆古今集に「秋風
にほころびぬらし藤袴つ
づれさせてふきりくす
鳴く」。

度 芋をもらはるゝなり
虫は皆つゞれと鳴やらむ
片足 〱 の木履たづぬる
誓文を百もたてたる別路に
なみだぐみけり供の侍
須磨はまだ物不自由なる臺所
狐の恐る弓かりにやる
月氷る師走の空の銀河
無理に居たる膳も進まず
いらぬとて大脇指も打くれて
獨ある子も矮鶏に替ける
江戸酒を花咲度に戀しがり
あいの山 彈春の入逢

○間の山—伊勢古市の間の
山よりはじまれる小唄。

○禪門—法體したるをい
ふ。

雲雀啼里は厩糞かき散し
火を吹て居る禪門の祖父
本堂はまだ荒壁のはしら組
羅綾の袂しぼり給ひぬ
齒を痛人の姿を繪に書て
薄雪たはむすすき瘦たり
藤垣の窓に紙燭を挾をさ
口上果ぬいにさまの時宜
たふとげに小判かぞふる革袴
秋入初る肥後の隈本
幾日路も苦で月見る役者船
す布子ひとつ夜寒也けり
澤山に兀めくと叱られて

ひさご集

一六七

碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

同 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

○藤垣—藤にてかきたる窓
なり(標註)。

○いにさま—行きがけ。

○秋入初る—秋の收穫が初
まる。

○澤山に—えらさうに。

○叱られ—原本吃られに作
る。今改む。

○御小人―雜役驅使等に從
ふ卑しき武士の職名。又
小者(コモノ)ともいふ。
○やしほ―八入。色の濃き
をいへり。

俳諧七部集

一六八

呼ありけども猫は歸らず
子規御小人町の雨あがり
やしほの楓木の芽萌立ち
散花に雪踏挽づる音ありて
北野馬場にもゆるかげろふ

正秀十九
珍碩十七

寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

秀 碩 秀 碩 秀

猿

蓑

乾 坤

○おもて起「まことに月花もおもておこすべき時なれや」(舉白集)

○五徳―大鏡には徳元の初學抄などにいへる五徳にあらずして、こは温良恭儉讓の五なりといへり。
○骨にて人を作り―この事撰集抄第四「高野參ノ事付骨ニテ人ヲ造ル事」に見ゆ。

○斷腸―白氏文集に「猿過巫陽始斷腸」。

○元祿辛未―以下雲竹書まで後刷本になし。

晋 其 角 序

誹諧の集つくる事、古今にわたりて此道のおもて起おこすべき時なれや。幻術の第一として、その句に魂の入されば、ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人の、骨にて人を作りたて、聲はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける、人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂(お)の法(お)のをろそかに侍にや。さればたま(む)し入たらば、アイウエ(エオ)よくひゞきて、いかならん吟聲も出ぬべし。只誹諧に魂の入たらむにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、誹諧の神を入たまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ、あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集をつくりたて、猿みのは名付申されける。是が序もその心をとれ魂を合せて、去來凡兆のほしげなるにまかせて書。

元祿辛未歲五月下弦

猿 養

雲 竹 書

一七一

猿蓑集 卷之一

冬

○時雨き「き」は「る」の誤との説あれど連歌にも「時雨れき」とつづけたる例多し。

○いさゝ長き一寸許、頭まるく、はぜに似たり。

○廣澤—洛西嵯峨にある池。

○沼太郎—鴻(ヒシクヒ)の一種。本朝食鑑卷五、鴻の條「菱喰(中略)又近俗有稱惠登菱喰、或稱沼太郎、又曰酒類大抵與菱喰、同而眼上有淡白條、背脚皆黒」。

○ぬかれて—欺かれて。

初しぐれ猿も小篋をほしげ也
 芭蕉
 あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲
 其角
 時雨きや並びかねたる鱒ぶね
 千那
 幾人かしぐれかけぬく勢田の橋
 僧丈
 膳所正秀
 鐘持の猶振たつるしぐれ哉
 膳所
 廣澤やひとり時雨る沼太郎
 史邦
 舟人にぬかれて乗し時雨かな
 尙白
 伊賀の境に入て
 なつかしや奈良の隣の一時雨
 曾良

○竹田—山城伏見の附近。句は「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行く君を思へば」の歌による。

○初霜に—劉元叔の詩句に「北斗星前横旅雁」。(和漢朗詠集)

○何とおよるぞ—狂言鞍猿「舟の中には何とおよるぞ。苦をしき寝に織をまくらに」の文句取。およるは寝るの義。

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり
 凡兆
 馬かりて竹田の里や行しぐれ
 大津乙
 だまされし星の光や小夜時雨
 羽紅
 新田に稗殻煙るしぐれ哉
 膳所昌房
 いそがしや沖の時雨の眞帆片帆
 去來
 はつ霜に行や北斗の星の前
 伊賀百
 一いろも動く物なき霜夜かな
 野水
 淀にて

はつしもに何とおよるぞ船の中
 其角
 歸花それにもしかん庭切レ
 同
 禪寺の松の落葉や神無月
 凡兆
 百舌鳥のゐる野中の杭よ十月
 嵐蘭
 こがらしや頬腫痛む人の顔
 芭蕉

砂よけや蟹のかたへの冬木立 凡兆
ならにて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな 伊賀士 芳
澁柿をながめて通る十夜哉 膳所裾 道
ちやはなやほる人なき靈聖女 越人
みのむしの茶の花ゆへに折れける 伊賀猿 雖
古寺の簀子も青し冬がまゑ 凡兆

翁の堅田に閑居を聞て

雑水のなどころならば冬ごもり 其角
この寒さ牡丹のはなのまつ裸 伊賀車 來

草津

晦日も過行らばがいのこかな 尙白
神迎水口だちか馬の鈴 珍碩

霜月朔旦

○赤柏―増山井(季吟撰)に
冬至にあらずといへども
十一月朔赤豆飯を用ひ、
之をあらがしはといふ
よし見ゆ。

○多賀―近江多賀神社。そ
の鳥居は本社より半里餘
をへたつる高宮にあり。

○寢ごゝろや―桃隣の粟津
原(寶永七年刊)によれば
其角旅先の芭蕉に此句を
送り、其返句に「住みつ
かぬ」の句を書送りたり
と。

膳まはり外に物なし赤柏 伊賀良品
水無月の水を種にや水仙花 羽扇坂田不玉
今は世をたのむけしきや冬の蜂 尾張旦 藁
尾頭のこゝろもとなき海鼠哉 去來
一夜くさむき姿や釣干菜 伊賀探丸
みちばたに多賀の鳥井の寒さ哉 尙白
茶湯とてつめたき日にも稽古哉 江戸龜翁
炭竈に手負の猪の倒れけり 凡兆
住つかぬ旅のこゝろや置火燧 芭蕉
寢ごゝろや火燧蒲團のさめぬ内 其角
門前の小家もあそぶ冬至哉 凡兆
木兎やおもひ切たる晝の面 尾張芥境

○貧交―杜甫の貧交行にならへるなり。

○巴―千鳥の群れて渦巻くをいへり。

○矢田の野―越前。敦賀の南。

○なぐれ―餘り、ついで等の意。句は逆志抄に「浦邊に通ふなぐれに來鳴といふ意也」とある如く、浦まで來りし千鳥が、偶偶野までも逸れ來りて鳴くとの意。

○余吾の海―近江、琵琶湖の北にある小湖。

みづづくは眠る處をさしれけり 伊賀半 殘

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり 丈 艸
浦風や巴をくづすむら衛 會 良
あら磯やはしり馴たる友衛 去 來
狼のあと踏消すや濱千鳥 史 邦
背門口の入江にのぼる千鳥かな 丈 艸
いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥 千 那
矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥 凡 兆
後士の見かへる跡や鴛の中 木 節
水底を見て來た良の小鴨哉 丈 艸
鳥共も寝入てゐるか余吾の海 且 路
死しぬるまで操な成らん鷹のかほ 且 藥

○この木戸や―去來抄に初五、此木戸を柴戸と書誤りしを改めし由見ゆ。古板本に埋木して改めし跡歴然たり。なほ中七は平家月見の條「さ候は惣門は鎖のさされて候ぞ」の文句によりしならん。

襟卷に首引入て冬の月 杉 風
この木戸や鎖のさしれて冬の月 其 角
からじりの蒲團ばかりや冬の旅 長崎暮 年
見やるさえ(こ)旅人さむし石部山 大津尼 智 月
翁行脚のふるき衾をあたへらる。記あり略之

○見やるさへ―卯辰集に「路通の行脚を送りて」と詞書あり。

首出してはつ雪見ばや此衾 美濃竹 戸
題竹戸之衾

○石部―近江。

○翁行脚の―奥細道の行脚なり。曾良も同行したれば次の句あるなり。竹戸は大垣の門人。なほ芭蕉の「紙衾の記」参照。

疊おめは我が手のあとぞ紙衾 會 良
魚のかげ鶴のやるせなき氷哉 探 丸
しづかさを數珠もおもはず網代守 丈 艸
御白砂に候す

○白砂―玄關の前の白砂(白洲)を敷ける所。

○膝突―公事などのをり膝の下に敷く半畳程の敷物。

膝つきにかしこまり居る霰かな 史 邦
椶櫚の葉の霰に狂ふあらし哉 野 童

○はつ雪や—五元集に「立徘徊」と前書あり。白氏文集、「人被鶴警立徘徊」。

○わきも子—我妹子。

○下京や—此五文字は芭蕉の置けるよし去來抄に見ゆ。

○穗屋の薄—信濃御射山祭は七月廿七日にして芒もて御假屋を作る。故に穗屋の神事ともいふ。此句更科紀行のをりの吟かといふ。

○籬もあげず—白樂天の「香爐峰雪撥籬看」の句による。

○てしまごさ—攝津豊島郡より産する筵（攝陽群談）。

○青亞—大津の蕉門。

○乾鮭も—赤草紙に此句心の味をいひとらむとて苦心せるよし見ゆ。

○白し—五元集には「白き」

○乙州が新宅にて—元祿二年の暮、乙州が家に滞在せる折の吟。

鶺鴒の橋よりこぼす霞かな伊賀示
 呼かへす鮒賣見えぬあられ哉凡兆
 みぞれ降る音や朝飯の出来る迄膳所畫
 はつ雪や内に居さうな人は誰其角
 初雪に鷹部屋のぞく朝朗史邦
 霜やけの手を吹てやる雪まろげ羽紅
 わきも子が爪紅粉のこす雪まろげ探丸
 下京や雪つむ上の夜の雨凡兆
 ながくと川一筋や雪の原同
 信濃路を過るに
 雪ちるや穗屋の薄の刈残し芭蕉
 草庵の留主をとひて
 衰老は籬もあげず菴の雪其角

雪の日は竹の子笠どまさりける尾張羽笠
 誰ととも健ならば雪のたび長崎卯七
 ひつかけて行や雪吹のてしまごさ去來
 青亞追悼
 乳のみ子に世を渡したる師走哉尙白
 から鮭も空也の瘦も寒の内芭蕉
 鉢たゝき憐は顔に似ぬものか乙弟
 一月は我に米かせはちたゝき丈艸
 住吉奉納
 夜神樂や鼻息白し面内の内其角
 節季候に又のぞむべき事もなし伊賀順琢
 家くやかたちいやしきす、拂同祐甫
 乙弟が新宅にて

○弱法師―物もらひ也、師走門々に、餅を貰ふの札を張るなり(撮解)。

○薄壁の―今年と來年と一夜のへだてを薄壁に喩へしなり。

○手の置かれたる―手をおくとは、憚る、遠慮する等の意。

○やりくれて―やりくりして一年も暮れての意か。

○くだり―「領」。袴等をかぞへる語。

人に家をかはせて我は年忘
 弱法師我門ゆるせ餅の札
 歳おほの夜や曾祖父ほぢを聞けば小手枕
 うす壁の一重は何かとしの宿
 くれて行年のまうけや伊勢くまの
 大どしや手のてをまかれたる人ごゝろ
 やりくれて又やさむしろ歳の暮
 いねく人と人にいはれつ年の暮
 年のくれ破れ袴の幾くだり

芭蕉
 其角
 長和
 去來
 同
 羽紅
 其角
 路通
 杉風

猿蓑集 卷之二

夏

○面おこす―其角序参照。

○野を横に―那須野にての吟。奥の細道参照。

○角櫓―城郭の隅々に建ててある櫓。

有明の面おこすやほととぎす
 夏がすみ曇り行衛や時鳥
 野を横に馬引むけよほととぎす
 時鳥けふにかぎりて誰もなし
 ほととぎす何もなき野の門構
 ひる迄はさのみいそがず時鳥
 蜀魂なくや木の間の角櫓
 入相のひびきの中やほととぎす
 ほととぎす瀧よりかみのわたりかな

其角
 木節
 芭蕉
 尙白
 凡兆
 智月
 史邦
 羽紅
 丈艸

○奥州―白雪の誹諧曾我
(元祿十二年刊)に奥州の
名にて此句出で「かれハ
鶴原の太夫云々」とあり。

○千鳥もかるや―無名抄に
祐盛法師寒夜の千鳥とい
ふ題にて「千鳥もかるや
鶴の毛衣」とよみしこと
見ゆ。

○うき我を―この句始め伊
勢長島大智院にてよみ下
五「秋の寺」といへり。同
寺に今その眞蹟を蔵す。
嵯峨日記にも出づ。

○若楓―曲水より芭蕉への
文通には「我住ところ弓
杖二丈ばかりにして楓一
本外は青き色を見ず」と
詞書あり。

○慈母墓―其角の母は貞享
四年四月八日歿す。享年
五十七、法名妙務尼。
墓は芝の二本榎、上行寺
にあり。

○別僧―旅寝論に路通の由
見ゆ。

○供られて―供せられて。

○亡人―杜國は元祿三年二
月廿日歿。

○淺々―清淺の意。「朝々」
の誤かとの説もあり(大
鏡)。去來の句にも「朝々
の葉のはたらきや杜若」。

○起出て―下句「心やもと
の心なるらん」(標註)。
時。

○起々―朝起きたばかりの
時。

○木べ屋―薪小屋。

○豊國―京都豊國神社。秀
吉の壯圖を咏みしなり。

心なき代 官殿やほとゝぎす 去來
こひ死ば我塚でなけほとゝぎす 遊女奥 刃

松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥 芭蕉

旅館庭せまく庭草を見ず

若楓茶いろに成も一さかり 膳所曲 水

四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂り哉 其角

葉がくれぬ花を牡丹の姿哉 江戸全 峯

別僧

ちるときの心やすさよ米囊花 越人

智恵の有る人には見せじけしの花 珍碩

翁に供られてすまあかしにわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里 亡人 杜國

青くさき匂もゆかしけしの花 嵐 蘭

井のすすゑに淺々清し杜若 半 殘

起出て物にまぎれぬ朝の間の

起々の心うごかずかさつばた 仙花

題去來之嵯峨落柿舎 二句

豆植る畑も木べ屋も名處哉 凡 兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道 曾良

南都旅店

誰のぞくならの都の閨の桐 千那

洗濯やさぬにもみ込柿の花 尾張薄 芝

豊國にて

○稚き時の一若竹をかける此句の自畫賛眞蹟に「みづからかき捨たる繪の反古を見出しけるに少年のむかしこひしくなりて云云」とあり。

○ともし一照射。夏山の狩なり。

○筑摩祭一近江坂田郡筑摩神社の祭。四月一日行はれ、女は關係せる男の數だけの鍋を頭に冠る俗あり。句は聖代の風教正しきをいへり。

○粽ゆふ一赤冊子に物語の姿も一集にはあるべきものとして此句を送れる由見ゆ。

○五月六日一元和元年五月六日大阪役にて蟬吟（良忠）の曾父藤堂良勝討死す。此句はその五十回忌たる寛文四年の吟なり。

竹の子の力を誰にたとふべき
たけの子や島隣に悪太郎
たけのこや稚き時の繪のすさび
猪に吹かへさるゝともしかな
凡 兆
去 來
芭 蕉
正 秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月
君が代や筑摩祭も鍋一ツ
越 人
芭 蕉

五月三日わたましせる家にて

屋ね茸と並てふける菖蒲哉
粽結ふかた手にはさむ額髪
限篠の廣葉うるはし餅粽
さびしさに客人やとふまつり哉
其 角
芭 蕉
江 戸 岩 翁
尙 白

五月六日大坂うち死の遠忌を弔ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年
伊賀蟬吟

奥羽高館にて

夏草や兵共がゆめの跡
這出よかひ屋が下の蟾の聲
芭 蕉
同

此境はひわたるほどよいへるもの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石
五月雨に家ふり捨てなめくじり
ひね麥の味なき空や五月雨
馬士の謂次第なりさつき雨
同 凡 兆
木 節
史 邦

奥羽名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左りの方、笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつづきたる五月雨いとわりなく打過るに

笠島やいづこ五月のぬかり道
芭 蕉

○かひ屋一諸説あれども、此句は蠶の飼屋なり。出羽尾花澤清風亭にての吟。

○はひわたる一源氏須磨巻に「明石の浦はたゞはひわたる程なれば」。

○實方一一條天皇の御時、行成と口論したる罪により、歌枕見て參れとて陸奥に貶せられ、長徳四年十二月彼地に歿す。

○はてなし坂―大和吉野郡南十津川にあり。元祿二年頃、叔母の田上尼と熊野巡禮に出でたる時の吟。一八八頁田上尼の句参照。

○つゞくりも―道普請も長びき五月雨も降りつゞくとなり。

○老醫―五元集に「村田忠庵が事也」と。

○古來稀なる年―七十歳をいふ。杜甫の詩句に「人生七十古來稀」。

○六尺―駕舁。

○しがらき―近江甲賀郡信樂。茶の名産地。

○游刃―原本游刃と誤れり。この句嵯峨日記によれば去來の吟と見ゆ。

○麥藁の―兒童の遊びに麥稈にて雨蛙の家を作ることあり。

○風流の、眉掃を―奥の細道参照。

○御袴の―元祿三年五月の千那の大和旅行手記に「法隆寺に到りて萬寶物拜す、中にも南無佛の太子とて二歳の像一しほ難有みあかぬさま也」とあり。高さ一尺九寸二分の木造着色の御像なり。
○田の畝の―此句、去來抄によればもと凡兆の句なる由。

○鳩―鳩の湖をいへり。

大和紀伊のさかひはてなし坂にて、往來の順禮をとどめて奉加す
すめければ、料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る

つゞくりもはてなし坂や五月雨 去來
髪剃や一夜に金情て五月雨 凡兆
日の道や葵傾くさ月あめ 芭蕉
縫物や着もせでよごす五月雨 羽紅

七十餘の老醫みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ、予にいたみの句乞ける。その老醫いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ、哀にもおもひよらずして、古來まれなる年にこそといへど、とかくゆるさざりければ

六尺も力おとしや五月あめ 其角
百姓も麥に取つく茶摘哥 去來
しがらきや茶山しに行夫婦づれ 正秀

つかみ合子共のたけや麥畠 膳所游刀
孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙 智月
麥出來て鰹迄喰ふ山家哉 江戸花紅
しら川の關こえて

風流のはじめや奥の田植うた 芭蕉
出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花 同
法隆寺開帳、南無佛の太子を拜す

御袴のはづれなつかし紅粉の花 千那
田の畝の豆つたひ行螢かな 伊賀萬乎
膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばされて鳩のやみ 去來